家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

4

48.4.12
受贈

第七十二巻　第四号　日本幼稚園協会

新刊!!

ちえ遅れの子の体育指導

リズム運動

加藤俊子著
定価 1,800円

問題のある子をかかえて
お困りの先生は
すぐお読みください。

赤白歩き・かに歩き・ハイヒール歩き・肩の上げ下ろし はてなはてな・ヘリコプター等々、80以上の運動遊戯をリズムにのせて展開するうちに、子どもの園に対する緊張感を解きほぐします。

B5判　ステレオシート2枚つき
推薦／三木安正・山口薫・小宮山倭・加賀谷哲郎

お待たせしました。
増補 新装版 出来！

教材とピアノレッスンのための

増補 新しいマーチ

保田　正編著
定価　550円

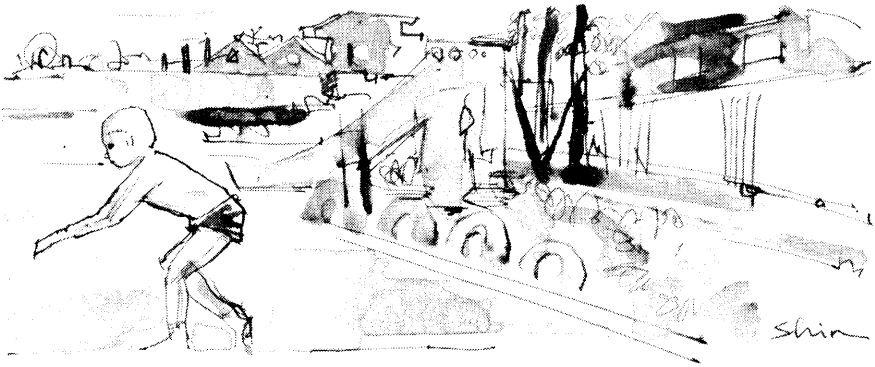
こんど新編曲の10曲を増補増頁し、装いも一新しました。これで活用範囲がより広くなりました。保育で子どもを動かす時に、また、バイエルを勉強の方は、併用曲集としてご利用ください。

A4判　94頁　〒110円

フレーベル館

幼児の教育

第七十二巻　　第四号



幼児の教育　目次

――第七十二巻・四月号――

〝児童権利宣言〟とわが国の幼児教育……荘司雅子…(4)

文化の中の教育　(二)
「教える人」のいない社会で
「自分で覚える」ということ……原　ひろ子…(8)

表紙　赤坂三好
カット　斎藤信也

©日本幼稚園協会
1973

日本幼稚園協会主催　幼児教育講習会特集――その二

★講演

脳の発達と育児……水野　肇…(13)

大石さんの話の前に……周郷　博…(31)

私の所感……大石　武一…(36)

講習会を終わって……周郷　博…(38)

座談会　環境とこころ……周郷　博…(46)

私の失敗……大崎　利恵子…(62)

幼児の観察研究
――実現しようとする意志を育てること(1)――……津守　真…(67)

〝児童権利宣言〟とわが国の幼児教育

荘司雅子

幼児教育は今や全世界の問題になっていることはすでに周知のとおりであります。特に国際連合内の人権委員が長年の研究を重ねて作製した〝児童権利宣言〟を一九五九年十一月に開かれた国際連合の第十四回総会に提出しました。総会は全員一致でこれを採択し、全世界に対して宣言してから、この問題はいっそう世界の人々の関心事となってきました。わが国も国連が宣言したその年末に参議院で全面的にそれを支持し、その趣旨の徹底を図るという決議を行ないました。わが国ではすでに一九五一年五月五日に、〝児童憲章〟を制定公布していますが、これはわが国の児童のための憲章であります。児童憲章や〝児童権利宣言〟でいう児童とは零歳から十八歳までの子どもをさしています。

未開社会では親が自分の子を育てるのに、特別な知識をもたなくてもよいのです。また子どもをどのように育てようと、それは親の勝手でありました。つまり子どもをどのように処置しようと、それも自由でありました。子どもは親の独占物であり、家に所属しているものであります。ところが近代から現代社会にかけて、子どもも大人と同じように、ひとりの独立せる人格と考えなければならないようになりました。この思想は歴史的にさかのぼれば、コメニュースやロックやルソーに始まり、その後、ペスタロッチ、フレーベル、オーエン、エレン・ケイ、そして現代に入ってデューイやシュプランガー、モンテッソーリやキルパトリックらによって、ひとりの人格としての子どもの権利が次第に確立されてきました。そしてそれが宣言や憲章の形で、児童の権利がうたわれたのは、アメリカの独立宣言やフランス革命後の人権宣言がその背景になっているとみることができます。

世界各国の憲法で「基本的人権」がうたわれていますが、それは多年にわたる過去の先覚者たちの並々ならない努力の結果であります。そして児童を、特に幼児から、独立した人格としてみ、その「基本的人権」を重んじこれを育てなければならないという児童の権利が高らかに宣言されたのは、一九二二年に

おおやけにされたジュネーブ宣言であります。さらに一九三〇年には、アメリカによって作製された「児童憲章」があらわれ、続いて一九五一年にわが国の「児童憲章」が発布されました。

一九五九年国際連合が宣言した「児童権利宣言」は、国際連合の諸国民に、国際連合憲章がうたっている基本的人権と、人間の尊厳および価値とに関する信念を、出生したばかりの乳児にももつべきことを確認させています。

そして前文に次のように述べています。

「児童は身体及び精神的に未熟であるため、その出生の前後において、適当な法律上の保護を含めて、特別にこれを守り、かつ世話することが必要であるので、

このような特別の保護が必要であることは、一九二四年のジュネーブ児童権利宣言に述べられており、また、世界人権宣言並びに児童の福祉に関係のある専門機関及び国際機関の規約により認められているので、

人類は、児童に対し、最善のものを与える義務を負うているものであるので、

よって、ここに、国際連合総会は

児童が、幸福な生活を送り、かつ、自己と社会の福利のためにこの宣言に掲げる権利と自由を享有することができるようにするため、この児童権利宣言を公布し、また、両親、個人としての男女・民間団体・地方行政機関及び政府に対し、これらの権利を認識し、次の原則に従って漸進的にとられる立法、その他の措置によってこれらの権利を守るように努力することを要請する」

以上の前文に続いて第一条は、次のように述べています。

「児童はこの宣言に掲げるすべての権利を有する。すべての児童は、いかなる例外もなく、自己またはその家族のいずれについても、その人種、皮膚の色、性、言語、宗教、政治上その他の意見、国民的もしくは社会的出身、財産、門地その他の地位のため差別を受けることなく、これらの権利を与えられなければならない」

「児童権利宣言」を一貫しているものは、わが国の「児童憲章」と変わらないが、ただ「児童権利宣言」の次の第四条の内容はわが国の「児童憲章」には十分出ていません。

「児童は社会保障の恩恵を受ける権利を有する。児童は、健康に発育し、かつ、成長する権利を有する。この目的のため、児童とその母は、出産前後の適当な世話を含む特別の世話及び保護を与えなければならない」

この条文はすでに前文に「出生の前後において、適当な法律上の保護を」しなければならないとうたっているのと相呼応しています。人間の成長発達は誕生から始まるものではなくて、

受胎のその瞬間から始まっているものであるならば、「児童権利宣言」にうたっているように、出生の前から特別な世話と保護とをあたえなければならないことは当然でなければなりません。ところが、わが国の幼児教育は出生前どころか、出生後の保育でさえいまだ満たされていない状態にあります。

次に「児童権利宣言」の第七条の前半をみましょう。

「児童は、教育を受ける権利を有する。その教育は少なくとも初等の段階においては、無償、かつ義務的でなければならない」

児童とは零歳児の乳児の人間から意味しているから、ここでうたっている教育の無償や義務的のことは、当然乳児の保育から無償であり義務的であると解釈できると思います。事実、北欧のデンマークやスエーデンなどは、この問題を相当解決しているし、社会主義の諸国もほとんど国の力で、妊婦の保護から乳児の保育が行なわれています。最後に「児童権利宣言」の第十条は幼児教育を世界的な基準で考えていくうえに特に留意すべき点であると思われます。

「児童は、人種的、宗教的その他の形態による差別を助長するおそれのある慣行から保護されなければならない。児童は、理解、寛容、諸国民間の友愛、平和及び四海同胞の精神の下に、また、その力と才能が、人類のために捧げられるべきであるという充分な意識のなかで、育てられなければならない」

右の第十条の精神や原理がＯＭＥＰ（世界幼児教育機構）に具体化され、三年毎に国内委員会と地域大会そして世界大会がもたれていることは周知のとおりであります。わが国も一九七〇年に正式に加入し、二回の国内委員会と一回のアジア地域大会をもってきました。世界の幼児教育で共通に未解決の問題を研究していこうというこの国際的な幼児教育機関を、今や私どもはよそごとのように考えることはできなくなりました。ひとりよがりの保育にあぐらをかくことはできない時勢にきています。「井戸の中の蛙、大海を知らず」のそしりを受けないように、私どもは幼児の保育や教育を広い視野で改めるべきところは大いに改めなければなりません。経済大国に成長した日本の教育は、各国の批判を受けています。このような秋に、私どもは幼児の知能開発の名において、狭い意味の知育「読み書き数え」にかたよった教育に、うき身をやつしてよいでしょうか。また逆に幼児の知的発達に即する真の知的教育を忘れてはいないでしょうか。さらに反省しなければならないことは、日本の幼児教育は心の保育に欠けているという批判であります。

幼児期は性格の基礎がつくられるということを知りながら、なぜか、今日の幼児は、家庭での時間はほとんどテレビと遊び、保育所や幼稚園では、とかく六領域のわくにはめ込まれた教育

を受けているのでしょう。そしてこのようにして心を豊かに育てられるということを忘れられたまま成長した幼児たちが、そのまま学校に入り、一貫した競争試験の準備教育を受けて社会に出ます。そしてこのような方々がやがて社会で日本の経済大国をつくり、各国へ経済侵略をすると嫌われるのは当然ではないでしょうか。このように考えて、わが国の幼児教育は、六領域を教える前に、まず幼児の心を育てることが先決問題ではないでしょうか。

今日の保育所や幼稚園では、ややもすれば「社会」を教え、「言葉」を教え、「音楽」を教え、「お遊戯」を教え、また「絵画・製作」を教え、さらに抽象的な文字や符号を教えているのではないでしょうか。幼児が自分自身で学ぶ場や機会が次第にせばまれてはいないだろうか。幼児の学ぶ権利は守られているでしょうか。幼児は絶えず内面的な精神的なものを求めているが、保育所や幼稚園では自然界や人間社会の表面的な皮相的なものだけを教えてはいないでしょうか。幼児の能力を開発するつもりの教育が、結果において幼児のもついろいろの芽生えをおさえつけてはいけないでしょうか。たとえば、幼児の描いた画やつくったものの結果にとらわれ過ぎて、とかくその結果だけを評価してしまうことはないでしょうか。私どもは幼児の作品だけで幼児を判断することをさけるべきではないでしょうか。幼児が何を作ったかを問題にするよりも、幼児の描く意欲、つくる心を育てることこそがよりたいせつな問題ではないでしょうか。そして幼児は何を描き、何をつくろうとしているか、その描く、つくる道行きはどうであったか、また幼児が描き、つくったものから自分で何を学んだか、さらにそこから何かを作ろうとしているか、といったことを、教師が問題にすることこそ、真に幼児を尊重し、幼児の学ぶ権利を守ることではないでしょうか。

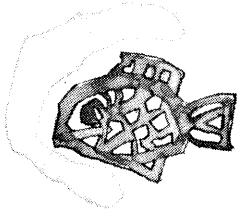
次に「児童権利宣言」にうたわれているように、幼児教育は世界的なレベルで行なわれはければならないときにきています。この秋に私どもは保育の面において、もっと国際的なセンスをつちかうことを心得ることが必要ではないでしょうか。わが国は欧米の先進国のように、他民族との交わりがはげしくないため、教育の面で、このような国際的なセンスについて、あまり考慮されていません。しかし世界はたいへん狭くなりました。今の幼児が大人に成長した段階では、他国との交流はもっとひんぱんになることでしょう。それゆえに幼児は家庭で保育所や幼稚園で、他人を尊重する、他人の立場を思いやる、風俗、習慣を異にする外国人を受け入れ、理解するしつけを受けなければなりません。幼児は幼児なりに、平等とか差別とかについて理解できるようになっているのです。

（広島大学）

文化の中の教育 (二)

「教える人」のいない社会で「自分で覚える」ということ

原 ひろ子



1 「師弟関係」の成立しない文化

前号で書きましたように、「人に教える」という事が、ヘヤー・インディアン文化の概念の体系の中には含まれていないのです。したがって、「教え方の上手・下手」などを評価しようということもありません。ただ、ものをおぼえる側の「おぼえ方の上手・下手」があるだけです。しかも、「おぼえ方」を教える者はいないのですから、「自分でおぼえる」以外には、ものごとを修得する道はないのです。

右の事実からもおわかりのように、ヘヤー社会には「師弟関係」というものも成立しません。「師弟関係」が成立するには、第一の条件として、当事者たちが、「教える・教えられる」という行動が存在する事を、意識していることが必要です。さらに、第二の条件として、「教える者」と「教えられる者」の間に相互に期待される意識や行動に関して約束ごとをもっている事が必要です。

人びとの間に「師弟関係」が成立しているような社会において、第一の条件の内容、つまり、「教えるとは何か」、「教えられるとは何か」、「何について教えるべきだと考えているのか」、「実際に、何について教えているのか」などの点で、文化差があることは、ご承知のとおりだと思います。このような点で、ドイツ、米国、中国、フランス、日本などのお国柄による差があるという事や、同じ国の中でも時代差が見られるという事です。さらに、第二の条件の内容、つまり、「教える者と教えられる者の間の上下関係

が全人格的なものと考えられているのか、それとも、特定の事象に関してのみ、その人間関係が成立していると考えられているのか――たとえばピアノの先生がレッスンが終わった途端にお友だち同志になるかどうかといったような――」、「師弟関係は一生つづくものなのかどうか――幼稚園時代の先生が結婚式やお葬式までの人間関係を保つのか――」といったような点などに関しても文化差が存在すると考えられます。そして、このような点に関する文化差を比較する事も興味ある問題だと思います。

しかし、カナダ北方の狩猟採集民ヘヤー・インディアンの社会で、私の前に展開された現象は、「師弟関係」以前（？）の問題を提示しているのです。

ヘヤー・インディアンと白人との接触は一七八九年のマッケンジー郷の探検に始まり、一八〇六年にはノースウエスト会社の毛皮交易基地が建設され、その社員二人～四人（おもにスコットランド人）がヘヤー・インディアンの狩猟域に常駐するようになりました。そして一八五九年にカソリック教会がたち、歴代の神父たち（フランス人、ベルギー人、アイルランド人など）がこの地域で狩猟、漁撈をしながら生命をつないできました。一九五〇年以降になると交通機関が発達して、これらの白人たちは、会社や教会の本部から支給される缶詰その他の保存食を用いるようになり、猟や漁に依存する事はなくなったのですが、それ以前は、この地に生活する者は、インディアンであろうと、おもに自給自足の生活を営んでいたわけです。

二〇世紀前半にこの地域に赴任していた神父さんたちを、カナダの各地にたずねて、「当時、どうやって猟をしていましたか」という質問をすると、その答えには、「私がベルギーから、フォート・グッド・ホープ（ヘヤー・インディアンの狩猟域内で教会や社会の建物のある所）についたばかりのときは、ジョシュア（インディアンの男）とよく猟に行ったものだ。彼が私の先生ですよ」とか、「私がフランスから着任したばかりのときは、アイルランド人のブラザーが猟に出かけて肉をとってきてくれたのだが、そのブラザーが病気になってから困った。その時から、だがジャン・バプティスト（インディアンの男）と猟に行くようになって、彼を先生にしてブッシュ（タイガの自然）について学んだものでした」というような話がかならず含まれていました。私の方から、「猟を誰に習ったのですか」と聞くまでもなく、「誰から教えられた」ということを答え

られてしまうのです。そして、当のジョシュアや、ジャン・バプティストは、自分が、それぞれ、神父さんに「教えた」とはつゆ思ってはいないのです。彼らは、「神父さんたちと一緒に猟に行った」と思っているのです。

この神父さんたちにしてみれば、ジョシュアや、ジャン・バプティスト以外の個人からも猟に関する情報を得たでしょうし、さらに自分一人で体得したものごともあるはずです。それなのに、特にジョシュアやジャン・バプティストから習ったというように特定の「先生」を指して、感謝の気持ちをこめて回想するのです。その時の表現は、自分の猟に関する学習体験全体を導いてくれた者としての象徴的意味を、ジョシュア個人、あるいはジャン・バプティスト個人に集約しているとさえいえます。そしてこれらの神父たちは、ジョシュアやジャン・バプティストに対して「教えてくれた人」に対する敬意をこめた親近感（「自分の教区の者」という感覚とともに）をもっています。

ヘヤー・インディアンであるジョシュアやジャン・バプティストは、これらの神父さん方に親近感をもっていますが、その気持ちは、「しばしば一緒に猟をした人」に対して持っているのであって、「自分が一から教えてやった者」に対して持っているのではありません。つまり、この場合、相互関係としての「師弟関係」は成立していないのです。

2　「人は人に指示・命令できない」という命題

ヘヤー・インディアンの生活について調査を進め、考えているうちに、私は次のような解釈に到達しました。

「教える」、「教えられる」という概念がない、ひいては「師弟関係」などが成立しないという、このヘヤー文化の基盤には、「人間が人間に対して、指示・命令できるものではない」という大前提が横たわっているのです。ここでは、親といえども子に対して指示したり命令したりする事はできない、と考えられているのです。人間に対して指示を与える事のできる者は、守護霊だけなのです。

そして人と人との関係においては、ものごとは、「自分で（守護霊の指示のもとに）おぼえる」以外はないのです。このようなヘヤーの論理を、私の心の中でつなぎ合わせ、その論理にてらしながらヘヤー・インディアンの具体的な言動を見てみるとつじつまの合うことが多いのです。こうする事によって、私は、前号で述べたような「驚き――カルチュア・ショック――」を、いちおう静める事ができる

ようになったと思います。つまり「○○を誰に習ったのですか」という質問がヘヤー社会においていかにナンセンスであり、「自分で覚えたのさ」という回答がいかに当然であるかという事についての納得がいくようになってまいりました。

では、ヘヤー社会で「自分で覚える」とはどういう事なのでょうか。

3　「自分で覚える」とは

前号の終りの方に書きましたように、「自分で観察し、やってみて、自分で修正する」事によって「○○を覚える」というのがヘヤー方式です。それがどういう事なのかを示す具体的なエピソードを、まず紹介しておきたいと思います。

一九六二年の六月に調査を始めたときの事です。ここではみな夏の初めから冬支たくにとりかかります。六月に湖や河の氷がとけ、とりどりの花が咲いて一気に夏がやってきます。しかし冬の足ははやく、九月の一日ごろには初霜がおり、九月中旬には初雪がふります。ですから六日の終りまでにマクラック（やわらかい皮の長靴）はAさんに、ミトン（防寒用の大きい皮手袋）はBさんに、ダッフル（マクラックの中にはく軽いフェルト製の長靴型の保温ばき）はCさんに、かんじき（雪の道を歩くとき足が雪の中に沈まないように、雪の上を浮いて歩けるようになっているスキーみたいなもの）はDさんにと、作ってもらうお願いをしました。

それぞれの人が、自分たちの冬支たくの合い間に私の冬物を作ってくれているようすでした。いちばん手がかかり、時間もかかったのが、かんじきです。幅広でたてに長いかんじきは、白樺の木わくの中に半なめしの皮を細長くひも状にしたバビシュが網状にめぐらしてあります。足をのせるところには長い布ひもがついています。これができ上がったのは紅葉の美しい九月の初めでした。そのころ、私は、厳しい冬をテントでキャンプしながら獲物を追いもとめるこのヘヤーの人びとと共に、自分が果たして越せるのだろうかという一まつの不安を持っていました。そして、越冬のための心と身体の準備は冬の来る前からやっておかねば、と何度も自分にいいきかせていました。そんなある日、私のかんじきを手にして考えました。

「さて、冬になって、雪の上をこれでどうやって歩くの

だろう。森林の細い道を曲がったり、Uターンするときは、こんなに長いスキーみたいなものをどうさばくのだろうか、いざ冬になって、さっさと早く歩けなかったら、皆におくれてしまうだろう。冬の遠出で足がおそいとおいてきぼりにされる。そして、そんなやっかい者は、誰のキャンプにも入れてもらえなくなるだろう。ここは、誰にとっても『お荷物はご免』という社会なのだから。さあ、今のうちにかんじきで早く歩く練習をしておきたいものだ」という気持ちになったのです。

そこで、かんじきを雪のない土の上に持ち出し、Dさんにむかって、「かんじきのひもの結び方、歩き方を覚えたい」と教えをこう気持ちでヘヤー語で話しかけました。するとDさんとまわりにいた老人たちが大笑いを始めました。それは「雪もないのにかんじきなんて!!」というトンチンカンな組み合せに対する笑いなのでした。そこを中学の教課程を経ている少女が通りかかったので、今度は英語で、「ね、教えてよ」というと、「こんなことは、教えたり教えられたりするものではないわよ。冬が来て、雪が降って、自分ではいてみればわかるわよ。そして歩くのよ」とやはり相手にしてくれません。そのうちに人びとの間では「ヒロコと土とかんじき」という三題話ができてしまいました。私の方は、冬になる前に、ヘヤーの世の中からほうり出されてしまったような愕然とした気持ちになってしまいました。

しかし、あっという間に冬が来て、人がかんじきをはき始めると、私は目を皿のようにして、人の足もとや足はこびを観察しました。そして、いろいろなひもの結び方を試みながらテントのまわりをぐるぐる歩いて、まだ浅い雪の上でトレーニングをしました。片足をピュンとはねあげて、他の足を軸として、身体をくるっとねじってUターンする方法も見よう見まねで覚えました。

「土にかんじき」の笑い話を伝え聞いていたおばあさんが、「雪にかんじきならさまになる。ヘヤー・インディアンになったかね」といってまた大笑いしました。

こうなると、「かんじきのはき方を誰にならいましたか」と聞かれた場合、私だって、「自分で覚えたんです」と胸を張って答えるほかありません。

—つづく—

日本幼稚園協会主催　幼児教育講習会特集－その二

◇講演◇

脳の発達と育児

水野　肇

水野先生の話の前に

周郷　博

今日は、皆さんテレビや何かでご存知の、水野さんの話です。私は今から二十年くらい前、水野さんがまだお若かったころに、戦後最初にオーストリーに会議があって帰ってまもなく、岡山の孤児院で話をしましたが、孤児っていうのは誰も笑わないんです。何を話しても笑わないんですよ。それで何かきくと、今来た人は誰のお父さんになってくれるだろうかって事しか考えてないらしいのね。

その時に水野さんは取材に来たという事です。その事は去年わかったんで、二十年前からの知り合いなんですけれども、私が大変尊敬している男らしい人です。学識が非常に広くて、とらわれていなくて、私は大変啓発されます。皆さんもよく聞いていただきたいと思います。

はじめに

ご紹介いただきました水野でございます。周郷先生は、私が何かできるような事をおっしゃってくださったのですが、決してそうじゃなくて、私は外野席の方から、医学とか医療問題を眺めておるという、大変横着な立場で、そしてまた好き勝手な事をいっておる、そういう立場でございます。

今日は脳の発達という話をせいということになっておるのですが、これは本当は、真面目にいろいろ申しますといろいろな事がありまして、おもしろくもありますが、ややこしくもあるということなんじゃないかと思います。私が今日申しあげます事は、決して金科玉条とお考えになっては間違いが出てくるか

もわからんという事を、最初にお断わりしておきたいと思います。それはなぜかといいますと、皆さんは、医学というのはよくわかった、数学や物理学の如き学問だと思っておられるかもわかりませんが、全然そうじゃないんです。心臓をつなぎかえてみたり、ちょっと軽わざみたいな事もしますけれど、本当は、人間の体はどうなっているのかとか、なぜ生きているかということは、よくわかっていないわけなんです。ですから、最近発達してまいりました大脳生理学というとも、まあ大体九分通りまでは間違いないだろうと思いますが10％ぐらいは違いがあるんじゃないかと思います。

たとえば、赤ちゃんを育てるという事一つをみましても、終戦直後には、その辺に子どもを放ったらかしておいて、泣いてもわめいても放っておけ、それが自主性をつくるのだと、アメリカから輸入された医学というか、育児学というのはいったわけです。ところが最近は、少なくとも一日四時間は子どもと接していなければならない、といわれているわけです。

それはなぜかというと、何もお医者さんが悪いんじゃなくて、医学というのは、そういう学問なんじゃないかと私は常々思っています。よくいわれるたとえで、月に衛星船が着陸するのに、なぜこの私たちの風邪というのが治らないのかというような事で、つまり私が申しあげたかったのは、医学というのは、本当は、試行錯誤の学問でして、あれやこれやいいながら、進んでいくということです。ただし、もし本当に人間の体が全部わかりましたら、医学というのはなくなったらいいわけでして、だからといって、私のいう事がいいかげんだというのではなく、今のところはこう考えられている、それでそれは、おそらく未来永却にわたって、90％までは正しいであろう、しかし、あとの10％はちょっと変わるかもわからないと、そういう意味です。

人間の脳

ところで、人間の脳というのはどういうふうになっているかという事から始めてみたいと思いますが、今日は、遺伝という話はぬきにします。生まれたところ辺からの、赤ちゃんの脳からしゃべらしてもらいたいと思います。

大体、人間の脳の中には一四〇億の細胞があります。一四〇億と一口にいうと簡単ですが、これがどのくらいの数かというと、今、五十歳の人が、一つ、二つ、……といって一秒間に七〇から八〇数えられます。そして数えていって、五十歳の人が七十歳で死んで、次にその子どもさんがずっと初めから数えて、またその人も七十歳で死んで、今年はお孫さんが数えて、その

人が三十五歳ぐらいの時に初めて一四〇億という数字が出てくるんです。そのくらい大きい数なんですが、逆にいうと、誰も脳の中に一四〇億の細胞があるということを数えた人はないという事です。

その一四〇億の中で、働いているのは四〇億しかない、あとの一〇〇億は遊んでいるわけです。皆さんは、人間の体というのは精いっぱい働いているように思われていますが、本当はそうじゃないんです。ずい分スペアーがあるわけです。たとえば、人間が思いきり食べたらどのくらい食べられるかというと、本当はどんぶりに十九杯食べられるわけです。ただし、それは、脳の中に「ごちそうさまでした」という信号を送る場所があるんですが、それをこわしましたら、どんぶりに十九杯食べられるようになるんです。そのかわり、十九杯食べたらそのまま天国へ行くようになってるんです。しかし、実際には今朝どんぶりに十九杯はもちろん、三杯食べてきた人っていうのも少ないと思うんです。それはどうしてかというと、人間は大変余裕のある生活をしているわけである。たとえば、心臓の鼓動というのは、一分間に七十うちます、だけど恋人が向こうから来たらどうなるかというと、たちまち一三〇から一四〇うつようになってるわけです。同じように、脳もスペアーがいっぱいあるという事です。

分裂しない脳細胞

人間の脳細胞のことで、ぜひとも一つだけ覚えておいていただきたいのは、普通、細胞というと、分裂すると、こう思われるんですが、実は、脳細胞だけが分裂しないんです。オギャーと生まれた時の細胞が、そのまま棺おけにいくのは、脳の一四〇億の細胞のほか何もないんです。目はそのままだとか、耳がそのままだとか、いろいろいいますが、これは全部細胞が入れかわっているわけです。とにかく細胞分裂しないということは、いろいろな事でいろいろ影響がある。だから脳だけ特別扱いするといっても、さしつかえないんじゃないかと思います。

しかし皆さんはきっと、私がこういったって、何で、赤ちゃんの顔はあんなに小さいのに、私たちの顔はこんなに大きいか、と思われるに違いない。これは実は、こういうしかけになっているわけです。

細胞というのは、たくさんの突起をもっています。脳細胞の場合は、一つの細胞から四〇本から一〇〇本の割合で突起が出ているわけで、これが互いにからみあいを作っているわけです。ですから、脳細胞は一四〇億あるわけですから突起は五六〇〇

億本ぐらいあることになります。このからみあいを作っていくという事が、実は脳の発達であるといえます。赤ちゃんの頭は小さくても、大人になると大きくなるという一番大きな理由は、この突起がからみあいをつくっていくということなんです。

たとえば人間の赤ちゃんは、生まれた時には目も見えない、それから何もできないわけです。ところがチンパンジーはどうかといいますと、生まれてすぐその辺をウロチョロして、えさを拾って自分で食べます。もし、人間の赤ちゃんがチンパンジーのように、生まれてすぐその辺の鍋か釜をあけて、飯を手でつかんで食べる。そのくらいの発達をしようと思ったら、お母さんのおなかの中に、二十一ヵ月いなければならないということになっています。これは、スイスのアルドフ・ポルトマンという人が計算したんですが、要するに、十ヵ月で生まれないで更にもう倍、おなかの中に入っていなければならないという事です。この事は実は、人間の赤ちゃんは、育てる必要があるという事なんです。〝氏より育ち〟といわれるのは、こういう事なんです。だから、おやじとおふくろが数学ができないなどということは、心配するに及ばないんです。それでなかったら、幼稚園も小学校も、中学校もなりたたんと思います。

脳の構造

脳の構造の中で、これだけは知っておいてほしいということだけを申します。

まず、脳の髪の毛のの生えている方に近いところに、新しい皮質というのがあります。そのもうちょっと内側に古い皮質というのがあって、もう一つ、おでこの下の方に前頭葉というのあるんです。それぞれ何をしているか、簡単にいいますと、新しい皮質というのは、知識、理性、判断というのを支配しているわけです。それから、古い皮質というのは、食欲、性欲、集団欲という、いわゆる本能を支配しているわけです。そこで、前頭葉というのは何かといいますと、これは新しい皮質の一部分で、ものを考えたり、ものを創り出したりするということをするわけです。この前頭葉というのは、どの動物にもありますが、発達しているのは人間さまだけなんです。これはぜひ覚えておいていただきたいと思います。

ですから、皆さんがヨボヨボの犬を飼っておられるとします。するとこの犬は、おそらく有吉佐和子の「恍惚の人」のような状態なんではないか、と人間は思うわけです。しかし犬はそんな状態になっていくことはないんです。犬には未来がない。人

間は、未来があるから悲しんだり喜んだりするわけです。これは実は重要な事なんでして、もし人間に未来がなかったら、世の中はもっと平和だと、私は思います。

前頭葉の説明は、またあとでもう一度いたしますが、さっき私は、突起が発達することが、とりもなおさず脳の発達だと申しあげた。これは具体的な例でいいますと、子どもが初めて歩く時、あれをごらんになるとよくわかりますが、もう体のあっちこっちを動かして、ようやく立ち上がって、何かにつかまって、やっとつたい歩きをするというのが初めて歩く時の状態です。あれは、ああいうふうなからみあいを、順番に全部チェックしていって、最後に歩くということになるんです。つまり、一つずつ点検しながらやっていくのです。

ちょうど、皆さんが電話をかけられた時に、隣の家にかけたらすぐ出ますでしょう。ところがご郷里の北海道だとか、鹿児島とかにかけたらなかなか出ないですね。これは脳細胞と似てるんです。それは、電々公社と比べものにならんくらい脳の方が早いですけれど……。もしかりに、途中のケーブルをひとつはずしたとします、すると全然つながらないわけなんです。脳だって、ある問題について思い出そうと思ってもなかなか思い出せない、そういう場合、他のことを考えてて急にパッと思い出す時があります。これはどういうことかというと、回路を伝わっていく時に、この回路のうちどこかが切れてるわけです。切れてましたらほかの側からいったら通じるということがあるわけなんです。そういう点では、非常に脳というのは電々公社に似ているということです。ただし、電々公社は脳の敵だという話があとで出てきます。

脳の発達—零歳から三歳の発達—

ところで、この脳の発達というのはどういうふうに発達していくかというと、大体零歳から三歳と、三歳から二十歳までは、同じだけ発達するんです。そして二十歳ぐらいでほぼ完成するわけです。

そこで、さっき私が申しました前頭葉という所は、零歳から三歳まではほとんど発達しない。これは非常に重要なことなんです。では、その零歳から三歳というのはどういうふうにして発達するかというと、この時期に入る情報の大部分は家庭の中の情報です。ですから、この時代は親のうしろ姿を見て育つということがよくいわれています。たとえば、目が見える、しかしまだものがいえないという子どもに、テレビの殺人現場を見せたとして、こんなの関係ないと今までは思われていたわけで

す。ところがそうじゃないんです。その脳の配線の中では、その殺人現場がちゃんと焼きつけられているわけなんです。これは大変恐ろしいことだと思います。家庭というのは大変重要である、といわざるをえないわけです。その間のことは、本当はどうにでもなるという要素があるわけです。アメリカのワトソンという心理学者が、〝私に生まれたての赤ちゃんを預けてくれたら、大学教授でも、芸術家でも、泥棒でも、何にでもしたててみせる〟といっています。

零歳から三歳

一　才能開発への疑問

このごろ、天才の開発法とか、幼児開発法とかいうのが一つのブームになっております。零歳から三歳までの間に、徹底的にピアノなんかん教えこんで、そうすればピアノがうまくなるという話です。だけど私は、この考え方には絶対反対なんです。それでは、この考え方が間違いかというと、間違いではないと思うんです。たとえば、生まれたての子どもに階段の上り下りを何回もやらせますと、非常に上手になります。あるいは小さい子に木登りの訓練をやらせたら、ターザンの映画に出られそうなくらい上手になります。そういう所に脳の配線の発達があるわけです。

ちょっといい落としましたが、脳の中っていうのは微弱な電流が流れているわけです。その電流みたいな流れによって、いろんなものが決まっていくわけです。そういう所の配線、たとえば木登りの配線というのが、何辺も練習させると早く発達します。ピアノのけいこを小さい時からしますと、手はよく動くようになりますし、譜も早く読めるようになることは間違いないです。

けれども、私はここが重要だと思うんですが、一体こういう事をやって意味があるのか、という事です。小さい時にそういう事をやって、そういう方面の脳の配線が発達したら、当然の事ながら他の部分はおるすになるわけです。ですから、その人が音楽家になれなかった時には、そんなみじめな事はないと思うんです。医学部を卒業したけれども、国家試験を何回うけても通らんというやつは、一番世の中で困った存在なんです。これは何になるかというと、ニセ医者になる以外に方法はないんです。

この零歳から三歳という時期は、将来世の中に出て何にでもなれるという、基礎的な素養というものが入るのが理想だと思うのです。それは決してむずかしいことではないんです。何も

塾なんかに行ったりしなくても、普通の家庭に育てば、それでいいということなんです。自分が将来何をやるかというのは、卒業してから決めたらいいんです。あるいは、まあ高校あたりで決めればいいわけなんで、職業というのはやっぱり、自分で決めるものだと思います。自分が音楽家になろう、なるんだ、という事で一生懸命勉強することはいいんです。しかし、オギャーと生まれた時に、この子を何々にしようというのは間違いだと思います。結局は、精神的に片輪な人間ができると思います。そしてこれは、まったく親が責任を持つべき問題です。

また一部に、この時期に数学を教えたらいいという人がいます。朝鮮のキム何とかいう、七歳で微分積分を解くという坊やがいますが、こんなのは、そういうふうに教育すればそうなるわけで、特別にびっくりすることはないと思うんです。だけど、こんな事をしてもし数学者になれなかったらどうするのでしょう。

二　まともな家庭・父親像

私は、この時期はまともな家庭で育つということを重視したい。朝から晩まで夫婦げんかをしているような実庭の子どもというのは、よくないと思う。まともな、やさしい家庭に育つ事が大切です。たとえば、開業医の先生なんかは、子どもが小さい時から「坊や、坊やは大きくなったら医者になるんだ」と朝昼晩いうわけです。そして、医者というのは世の中で一番いい仕事だ、人を助ける、というわけです。そして子どもが六歳ぐらいになった時、自分から「ぼくは医者になるんだ」というようになる。こうなると親の計画は完成したわけです。

家庭が子どもの将来を気にすることは悪いことではないと思います。しかし、家中がある方向へ、ぼくは何々になるんだといわせるのが本当に子どものためになるのかという事です。ある小説に「おれは社長になるんだ」と一日五百回いっていると、何日かたつと本当に社長になったような気分になるというのがありますが、これはまったく、大脳生理学を応用したことで、洗脳というのはそれに近い事です。

私は戦争中、中学へ行っていました。はずかしい事かもしれませんが、われわれは神風というのは本当に吹くと思っていました。サイパンが玉砕し、アッツ島が玉砕し、あっちこっちが玉砕しても、最後には必ず勝つと思っていたんです。そういうふうに思うようになったのは、われわれは物心ついてから中学を卒業するまで、陸軍とか海軍とかいう中で育ってきたわけです。学校だってそうで、体育で「今日はちょっと体の調子が……」なんていおうものなら、運動場二回走れということになる。

そういうふうな教育をうけて育った人間は、そういうもんかいなと思ってるわけで、終戦になってだまされたと知って、ずい分左へいった人間が多かった。しかし、今では右へ帰って会社の重役になっている者が多い。このように思想というのはあとからどうにでもなるものだと思いますが、小さい時にふきこまれたものは、全部ぬぐいさる事はできない、それは行動になっても現われるという事です。

私たちが料理やへ行きますと、そこのおかみさんが必ずこういうんです。「あのう、水野先生は昭和の初めの生れですか?」どうしてわかるかというと、出たものを全部食うというんです。(笑い)私は決してそういうふうに考えてものを食っているわけではないんです。われわれの年代は皆そうだと思いますが、これは恐ろしい事ですね。小さい時から、夢に見るのは何かというと、腹いっぱいおいしいものを食う事だったわけです。

実は、〝おふくろの味〟というのもこれなんです。あなた方が小さい時にお母さんがよく作ってくれたものというのは、今でも好きだと思います。そういうものが、いくつになっても好きだというのは、脳の配線の中で印象が強いという事です。そしていつまでも忘れないという事です。

今、世界中で行なわれている治療の方法に、音楽をきかせるミュージック・セラピーというのがあります。これは、どんな人間でもワルツをかけたらいい顔をするんです。なぜかといいますと、おそらく胎児が初めて聞く音というのは、お母さんの心臓の音で、これが3/4拍子なんです。

赤ちゃんをワッといって驚かしたりする事は決していい事ではないと思います。テレビの殺人現場とか夫婦げんかも、そういうパターンが入っちゃうわけです。いつもいちゃいちゃしているのもどうかと思いますが、この時期に大切だと思うのは、「まともである」という事と、もう一つは父親像というのがなければだめだと思います。このごろは母親像ばかり目につきます。新幹線に乗ったりすると、リクリエーションで出かける子ども連れを見ますが、おしめをかえているのは五人のうち三人まで男の人です。女の人は週刊誌を読んでる。そりゃ夫婦ですから、お互いに相談してやってるんでしょうが、子どもがどういうふうにとるかというと、やっぱりうちではママばかりいい目を見てると思うでしょう。

登校拒否というのがあります。学校へ行く時になるとどこか痛くなる、急に熱が出たりする。それに似たものが光化学スモッグだといって今問題になっていますが、かくいう私も登校拒否児童だった時代があります。私は図工がきらいで、図工のあ

る日は今でも覚えています。金曜日でした。金曜日になると腹が痛くなったり、頭が痛くなったりするんです。それでよく学校を休みました。

この登校拒否児童というのは、大体父親像のない家に多いのです。父親像というのは、子どもの中に放っておいてできるものじゃない。パパの育児学というのがあると思います。たとえば、今の世の中でしたら、車にはねられないような歩き方を数えるというのは、お父さんの仕事なんじゃないかと思います。お母さんでは無理なんです。そういうふうに、家庭の教育というのは、おのずからお父さんとお母さんの役割というのがあると思います。

三　一日四時間のskin　ship

それから、この時期にもう一つ重要な事は、母親は一日四時間子どもに接する必要があるということです。これはskin shipという事です。先ほど私は、本能の中に食欲、性欲、集団欲というのがあるといいましたが、これはまさに集団欲であります。つまり一人でいたらさびしい、孤独の反対であります。しかしこれで脳は正常に発達していくわけです。

だからといって夫婦共働きがいけませんといっているのではありません。しかし一日四時間は子どもと接していられる働き方をし、また社会がそういう事のできるシステムを作らなければいけない、ということです。

私は、やはり保育の考え方というのは基本にあるのではないかと思います。つまり、世の中一般では、何でも道義的な事が正しい、あるいは科学的な事は正しいと私たちは思ってきて、そういうムードが強いわけです。しかし近ごろ、公害というものが出てきて、初めて、科学的に正しくても人間にとっては迷惑だということがいっぱいあるという事がわかってきた。なぜ、赤ちゃんがお母さんを慕うかという事、それはあたり前だといえばそれまでですが、明確にしてくれる人はないわけです。皆さんの中で、お母さんを好きでない人はいないと思います。科学なんてそういうもので、はっきり意義づける事はできないのだと思います。

たとえば東洋医学なんて皆そうです。漢方というのがあって、たしかにいいところがあります。しかし漢方のいっていることが、全部いい、正しいとは私は思いません。しかし、西洋医学が全部正しいかというと、ますますそうではないと思います。病気なんて二六〇〇くらいあるわけですが、そのうちわからないのが一〇〇〇ぐらいあります。神経痛なんて医者が治すものじゃありません。どうかした拍子に、階段から落ちた拍子に治

ったという話も本当にありました。

それと同じように、子どもがなぜ母親を慕うかというのも、わからないところにいいところがあるのだと思います。ですから、この零歳から三歳のころには、できるだけ子どもに接してやることが必要です。といっても接しすぎてもだめなんです。ご承知のように、接しすぎるとマザー・バーンド・チャイルドになり、放ったらかすとホスピタリズムのようになる。どちらも依頼心が強いのです。原因はまったく逆なのに……。

眠り

赤ちゃんはよく眠りますね。眠るという事はどういうふうに考えたらいいかというと、眠るという事は脳の一番の栄養になるんです。脳の中には電流みたいなものが流れている、この弱い電流にバッテリーが必要でして、それを充電するのが眠りだと、考えていただければ結構です。自動車のバッテリーの充電は、八時間の充電をするのに十二時間充電してみても意味はない、しかし四時間充電したら、半分充電できるかといえば半分以下しかできないんです。脳もそれに似てまして、大体七時間寝ればいいのを、十二時間寝てもあまり意味はないんです。脳の充電は毎日やらなければいけないんです。

今私がここで、人間は眠っている方が正常か、起きている方が正常かときますと、大抵の方は、そりゃ起きている方が正常だとおっしゃると思います。しかし実は、人間は眠ってる方が正常なんです。それはなぜかといいますと、今皆さんは私の話をきいていらっしゃる、すると私の話は耳から入って脳にいくわけです。そして脳からどんな信号がいくかというと、まず、起きてなさいという目覚めのパルスが出すわけです。私の話がおもしろくないとこの目覚めのパルスはだんだん弱まっていくわけです。ですから、一人も眠らせずに私が話し終わったら、この話は大変おもしろかった、という事になります。よく講義をする人で「あそこの生徒はけしからん、私の話の半分ねとった」という人がありますが、けしからんのは話す方で、話がおもしろければ眠らないのです。

こんなふうに、人が眠るという事は簡単な事なんです。光と音を遮断したら寝られるわけです。そこで、われわれの生活の眠り、次に赤ちゃんの眠りについて話したいと思います。

われわれの眠りというのは、大体二時間おきに行なわれています。これは動物によって違いますが、皆さんのごらんになれる動物の中で、一番睡眠時間の短いのはキリンです。キリンは二十四時間中二十分しか寝ない。だからキリンというのは偉い

ようにいうでしょう、よく勉強のできる子を〝きりん児〟といいます。これは誤解ですが、二十分しか寝ないでも平気だからいわれるんでしょう。しかもおもしろいことに、キリンというのは首の先に顔がついていますが、顔をおしりの所へもってきた姿勢で眠るんです。しゃがんで。この姿勢は猛獣におそわれた時に一番危険な姿勢なんです。それでキリンは安全のために二十分しか眠らないといわれているんです。

ところが、馬はよく寝るんです。そして立って寝るんです。いつおそわれてもパーッと逃げられるようになっています。これは動物にとって重要な事なんです。だから、一番のうのうと寝ている動物は人間なんです。

ところで、人間はどういうふうに眠るかというと、今いいましたように、二時間単位で眠るわけです。まず最初に入眠層というのがある。二分から三分ですが、これは人によって違いますがそれぞれの平均を足しても二時間にはなりません。皆さんが夜おやすみになる時、本を読んでおやすみになる方がありますが、その時目は活字を追っているという事はわかるけれども、脳は明後日の事を考えている。こういう状態が入眠層です。ですからおもしろくてたまらないような本を読んでいますと、なかなか入眠層に入らないのです。

この次に中等度の眠りというのが三十分から四十分ぐらいあります。これはたとえば、ご主人が奥さんより先に寝ているとする、するとあとから寝る奥さんが、ちょっと化粧品の音をさせただけで目がさめるという、こういう状態で、平安朝なら衣ずれの音で目があくというような事です。

そしてこのあとで、深い眠りというのが四十分から五十分ぐらいあります。これは、鼻をつまんでも、あるいは泥棒に入られても目がさめない、そういう時間が人間には一日のうちにあるということです。

逆説睡眠

それからこの後に、逆説睡眠というのが二十分から三十分あります。こういう名前がなぜついているかというと、これは脳波にとりますと入眠層に非常によく似ているわけです。それで初めは入眠層と同じだと思われていたんです。ところが実は、まったく違うということがわかりまして、逆説という名前がついたわけです。

入眠層、中等度の眠り、深い眠りという三つは、脳が眠って体が起きている。これに対して逆説睡眠の方は、脳が起きていて体が眠っているんです。ですから、一口に眠りといっても二

種類あるということになります。それで、これはどういう状態かといいますと、要するに「夢を見る眠り」です。そして、体は眠っているわけですから体がダラッとする。赤ちゃんが眠ると急に重くなるのはこれなんです。血圧も下がるし脈はくも下がるし、呼吸も少なくなる。そして三十分ぐらい続くのです。

この逆説睡眠というのは非常に大切なもので、脳は起きているといっても全部が起きているんじゃないんです。全部起きていればもっとつじつまの合った夢を見るはずです。おそらく脳のある部分が起きていて、ある部分は寝ているという事になるでしょうが、そのへんはまだよくわかっていません。

それから、この逆説睡眠という時に目が覚めますと、すぐにでも仕事にとりかかることができます。ですからそういう起き方をすれば、その日はさえているということになります。

赤ちゃんの場合はどうかというと、生まれたての赤ちゃんは十六時間睡眠です。ただしそのうちの八時間はこの逆説睡眠です。大人の場合には、逆説睡眠は大体八十分か九十分ぐらいしかないわけです。一番長い人でも全睡眠時間の四分の一ぐらいです。ちょっと話が変わりますが、睡眠薬をのんで寝ると、必ず朝の目覚めが普通と違います。それはなぜかというと、逆説睡眠の時間が短いからで、こういう意味からも自然睡眠がいいのです。

前頭葉の発達

ところで、零歳から三歳までの赤ちゃんは前頭葉が発達しません。四歳ぐらいになるとぼつぼつ前頭葉の発達の芽生えが出てきます。これはどういう事かというと、三つぐらいまでの赤ちゃんは、割合に正確にものを言います。それはなぜかというと、親の言う通りを言うからです。しかし四歳ぐらいになると自分でものを言おうとするんです。ところが前頭葉が充分に発達していない時期―四歳ぐらいでは、時間とかそんなものはちともわかっていないんです。だから「あした、デパートへ行ってきた」なんて言うんです。そんな誤りがいっぱい出てくると親は「うちの子はこの間まで正しい事を言ってたのに、近ごろは間違うばっかりだ」と少し脳がおかしくなったのではなどと思います。しかし、赤ちゃんがこういう事を言うようになったら、とりもなおさず前頭葉が発達してきたという事なんです。

だから、重要な事は間違うという事です。間違うという事は悪い事のように思われるかもしれませんが、私は人間の脳にとって一番いい事は、忘れる事と間違うという事だと思います。もし忘れなかったらどうなりますか、人類は滅亡していたんじ

ゃないでしょうか。忘れる事はありがたい事です。それから、試行錯誤するという事は間違うという事なんです。

とにかく前頭葉は、この辺で芽生えがおきます。たとえば三歳児が幼稚園に入ったとします。すると最初の年は、かけっこをさせてもニコニコしながら走るわけです。しかし、来年小学校だというころになると、一生懸命走ります。つまり一等になろうという事が前頭葉が発達してきたという事なんです。

そういうふうにして、四歳、六歳と少しずつ芽生えがあって、本格的に前頭葉が成長し始めるのは十歳からなんです。十歳以下の自殺というのはありません。自分で自分を殺すという事を考えるのは、前頭葉が発達しないとできない事です。こうして、十歳から二十歳くらいまで前頭葉はどんどんどん発達していくわけです。

もう少し詳しく説明しますと、人間に未来があるのは前頭葉があるからだと申しましたが、まったくその通りで、たとえば私が手おくれの胃ガンになったとします。すると私に痛みがある。これはどうしてかというと、がん細胞が末梢神経を圧迫するからです。これは痛覚遮断剤というのをうてばとまります。ところが注射をうっても苦しいというのはとまらない。苦しいと痛いは別で、苦しいというのは未来があるから苦しいんです。やっぱりもう少し生きていたいとか、子どももまだ大学に行っていないし……とかいろいろ考えるから苦しいわけです。

そこでガンになった時に前頭葉を切ったらどうなるか、（ロボットリーといいますが）前頭葉というのは、つけ根をちょっとやると切れるんです。ガンで苦しい時はどうするかというと、麻薬をうつわけです。ところが麻薬中毒の人がガンの末期になるとこれがきかないので、前頭葉切断手術をしたという例がいくつかあります。すると昨日までものすごく苦しそうな顔をしていた人がニコニコニコするわけです。犬やネコとあまり変わらない状態になるわけです。死ぬということに関する恐怖はなくなります。私は、ある意味において、人間でなくなるという意味においてはこのロボットリーは問題があると思います。「恍惚の人」というのは、その前頭葉がやられていくようすが出てくるわけです。つまり前頭葉というのは〝前向き〟という事なんです。

〝殺す〟ということ

極端な事をいいますと「殺す」という事は前頭葉なんです。動物の場合、同一種類の中では殺し合いをするのは人間だけなんです。犬なんかは、けんかをする、片方がキャーンといえば

勝負あったという事になるんです。人間だけがなぜ相手を殺すかというと、実は、前頭葉というのは、極限の所へいくと相手を殺すという事なんです。

では、前頭葉というのは殺しばかりか？　そうじゃないんです。もう一つ、そういう事をやっちゃいけないとブレーキをかけて、お互いに仲良くやらなきゃいけないというふうに考えるのもまた、一方にあるわけです。前頭葉の中には戦争と平和が同居しているんです。テルアビブで自動小銃をうった日本人というのは、前頭葉の中では前向きであった事には違いない。しかしこういう事をしてはいけないというブレーキのきかなかった集団であった事もたしかです。その限りにおいては、前頭葉が片輪に発達したというのがあいうふうになるわけで、連合赤軍も似たようなものです。結局人間というのは、おいつめられていくとブレーキがきかなくなる。そういう脳の構造になっているのではないかと思うのです。

前頭葉を鍛える

そこで、もう少しこの話をわかっていただくために、前頭葉を鍛えるというのはどうすればいいのか、という事を申しあげたいと思います。

小学校や中学校で一番前頭葉を鍛えるのは何かといいますと、作文と体育なんです。作文というのはどういう特徴があるかといいますと、端的にいってカンニングのできない学科なんです。脳の後の後頭葉や、側頭葉にある情報をひき出して、それを組み立てていくのが作文なんです。教育の education という言葉の語源であるEDUCALEというラテン語は、教えるという意味ではなく、「引き出す」という意味なんです。私は、教育とは教えるのではなく引き出す事であると思う。前頭葉が後の方から情報を引き出す、そういう方向へもっていく事が教育という事なんだろうと思います。

では、体育は何か？　体育は決して腕くらべ、力くらべと違うんです。体育というのはすべてルールがあり、その中でやっていくのが体育の大きな意義だと思います。たとえば一〇〇メートル競走で「おれは九十五メートルまで一等だった」といくら頑張ったってメタルはくれないんです。一万メートル走ると、おそらく百人中九十九人までは苦しいと思います。しかし辛くても走るという事に意味があるんです。「オリンピックは参加する事に意義がある」とはクーベルタンの有名な言葉ですが、それは旗を持って入場式に出る事をいったのではなく、競技を最後までやりぬく事に意義があるといったのだと思います。

今の中学の制度では、二年生までしか運動をしない。二年の三学期ごろに運動をやめて、一生懸命高校受験の準備をしています。ところが重要な事は、一体スポーツをやったら入学試験に落ちるのかという事です。ある中学で、六年間にわたって、二年生で運動部をやめた者と、最後までやった者とを比べたわけです。そうしましたらずっと続けた生徒の方が成績の上がる率も高く、いい高校へ入っている。私は決して現在の試験制度を肯定しているんじゃありませんが、スポーツで頑張るという事、入学試験で頑張るという事の中には、共通点があるという事です。だから時間ばかりかけて勉強しているのがいいのではないというわけです。

作文―物を書く

作文と体育の話をしましたが、実際はこの二つは軽視されるわけです。入学試験の科目にないからです。私がさっき「電々公社は脳の敵だ」といったのは、実はこの事なんです。つまり、私たちの現代生活というのはほとんど電話で用が足りるようになったわけなんです。このごろラブ・レターという事をいいますと、〝あんた、昭和一けた生れやナ〟という事になります。今は全部電話です。ところがこのラブ・テレフォンというのが、本当に脳をちゃんと発達させるかというと、私はそうじゃないと思います。原稿を書くという事としゃべるというのは、脳の使う部分がどうやら違うらしいからです。

私たち日本人の祖先が、なぜ日記をつけたか。これは意味のある事だったと思います。ラブ・レターというのも大変よかったと思います。とにかく一生懸命書いたと思うのです。そういう意味で、電々公社は前頭葉の敵だと私は思います。しゃべるというのは簡単で、耳が聞こえて言語障害がなければしゃべれるわけです。だから、前頭葉を鍛えるためにはそれだけではだめなんです。

学科にみる遺伝

皆さんの興味ある事で脳に関係のある事でといいますと、一体親の才能はどの程度子どもに遺伝するか、という事がでてきます。これは、小学校の時の成績を中心に東大で調べたデータで、父母の小学校の成績と子どもの小学校の成績を比べたものですが、それによると意外や意外、皆さんはきっと数学なんか遺伝すると思うでしょうが、数学というのはあまり遺伝しません。一番遺伝するのは、図工と体育です。その次は家庭科なんです。

私がＰＴＡの会長をしていた中学の家庭科の先生に「実は先生、こういうデータがありますよ」という話をしましたら、「そりゃ先生そうですよ」というんです。中学校でもよく洋服を縫わされたりするわけです。すると洋服を縫ってくるのは大抵その子の母親だというんです。ところが母親がうまい場合は大抵子どももうまいというんです。ですから母親の作品だからと減点しなくても、同じ事だから、親がやろうが子どもがやろうが成績に違いはないと思う。とその家庭科の先生はいっておられました。私も、うちの娘に、数学というのは遺伝しないという話をまずしておいたんです。だからやっぱりやらにゃいかんと思ってやるようになりましたが、初めから遺伝だと思わせたら全然やらなかったと思います。

それから、幼稚園、小学校、中学でなさるような音楽は、遺伝因子にはまったく関係ありません。ただし、歴史に残るような音楽家は全部遺伝だという事です。バッハの家系は、歴史に残る人が二十九人も出ているそうです。モーツァルトだって、両親とも才能がありました、大作曲家となると遺伝はある、しかし高校ぐらいまで、音楽に5がついたからといって、遺伝とは全然関係ないという事になります。

まん中あたりは、国語、英語です。これはそうだと思います。何より証拠に、ロンドンへ行ったらこじきでも英語をしゃべっているわけです。零歳から三歳の間に入ってくる母国語というのは、非常に重要なんです。どんなに語学ができるという人でも、やっぱり母国語の方ができるんです。しかし私の人生経験でいうと、どうも英語がよくできると日本語の方がおるすになるというのはあると思います。私がアメリカにいた時に、アメリカに十六年いるという医者と話しましたが、やはり日本語がおかしいわけです。その人なんか日本で生まれて日本の大学を出てから、プロフェッサーとけんかして米国へいったわけです。英語を母国語にし、市民権もとって、そうなってくるとますます日本語がおかしくなってくる。ところがその人は、夢をみる時は日本語だというんです。実におもしろいと思う。語学っていうのはそういうものです。脳というのはこういう具合に発達していくわけです。

抑止力をつける

小さく産んで大きく育てたらいいかというのでもないんです。結局は前頭葉が鍛えられるような、創造性豊かな子どもというのがいい、これが頭がいいという事なんだろうと思います。ただ、今の教育をみますと、幼稚園は別として、小学校はまだい

いとして、中学高校でははっきりいえば安物のコンピューターを作っているような教育をしていると思います。考える力というのは昔の方があるように思えます。

幼稚園のころは、創造性という事はむ茶苦茶に発達してないわけなんです。そこで何かうまい手をさしのべて発達させてやる事が、幼稚園教育の中では重要な事だと思うんです。自由にやらせるという事と、自由気ままにやらせるという事は違うと思います。

教育の中には二種類あって、前頭葉を鍛えるというのは前向きになるという事と、抑止力をもつという事の二つがあるわけです。さっきの体育なんかは、この抑止力ができるという事です。これが全部しつけだとは思いませんが、ある部分はしつけであると思うんです。ですから、相反するものがすべてのものにあって、それから両方発達していって、人間としてうまいこいくんじゃないか、というのが私の考えです。私は、今いわれている創造性の教育というのは、前向きだけがいわれてて、ブレーキをかけるというのが全然でてこないじゃないかといいたい。天真らん漫というのは結構な事です。しかし、ブレーキをかける事を、どこでも教えなかったらテルアビブ空港になる可能性は、やはりあると思うんです。

おわりに

大体、脳というのは、二十歳ぐらいで完成します。それから先は、ただ退化するかというと、やはりよく使ってる人の方が退化の程度は遅いという事です。脳の老化の早い人は首から下の老化も早いという事です。それで、一番早い老化のテンポというのはどれくらいかというと、こういう説があります。それは、一日に十万個ずつ脳細胞がだめになる、二十歳をすぎたら脳細胞がだめになるという事は、蛍光灯が切れて入れかえてないという事なんです。脳が細胞分裂するなら治っていくんですけれど、細胞分裂しなければそのまま残っているわけです。一日に十万個という事は、一年に三千六百万、十年に三億六千万、三十年に約十億です。すると五十歳で十億アウトになるわけで、脳細胞の四分の一がアウトになるわけです。そこで五十歳ぐらいになると、あ、あの人、顔は覚えてるけど名前が出てこない、というふうになるんじゃないか、とこういう説があるわけです。

ただし、脳はそうですが、前頭葉というのは死ぬまで発達するんです。だから会社の社長さんというのは年をとった人がなっています。キャリアというのはそういう事だと思うんです。若い人と比べたら、徹夜しても、団交でねばる事も、走っても、

何をしても勝てないわけです。たった一つ勝てるのはキャリアがあると、つまり前頭葉の鍛え方が違うというのが、社長を作るわけです。前頭葉は、死ぬまで発達して、脳軟化になった時は前頭葉をやられる事が多い。そうなると喜怒哀楽というのがなくなります。これが天寿だという考え方があるかもしれませんが、老化というのがそういう事である事には違いありません。どうか皆さんも脳を使う事を考えていただきたい。とにかく朝から晩までテレビを見ているというのは、提供された情報を得るという、つまり受身で、私はこういう問題を知りたいと思ってやる場合と違うんです。これは明らかに脳の発達において違います。

先日、アメリカの雑誌を読んでいましたら、こんな事が書いてありました。一番いい整理の方法というのは、郵便箱の下にゴミ箱をつけることだ、と。うまい事をいうなと感心しました。自分から求めた情報というのは大切にします。私はここに、ノートを持っています。このノート一冊で朝から晩までしゃべれるくらい書いてあります。何でこんなノートを持っているかというと、質問が出た時にお答えしようと持ってきたんですが、ともかく、これは自分で求めた情報ですから非常に大切なんです。だから脳というのは、前向きに求めた情報が大切だということです。

では、私の方からの一方的な話はこれで終りにします。長い事ありがとうございました。

（拍手）

こんなにおもしろく話してくれるとは思っていませんでしたが、よくやったもんだなと思います。内容も、今までの講演のように幼稚園ベッタリの狭い所じゃなく、人生全般に広がった所で話してくれたと思います。二時間半ちょうど話すといって、五分前でピッタリやめられましたけれど、自分で脳のことをよく知ってるせいでしょうか、よくやめましたね。

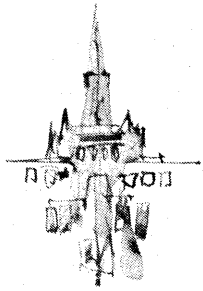
私もずい分、脳というのに興味をもって本を読みましたが、水野さんのように、とらわれなくて、そして正確で、いろんな世界を総合して考え方を構成している人というのは珍しいと思います。外山先生の話と共通してあるものがありますね。母国語、作文など……。専門家というのは、本当にせまくなっちゃったと思うんです。外山先生も専門家じゃないので非常にいい話でした。不思議にも、つながってると思って、私自身も考えがはっきりしてきたと思っています。どうもありがとうございました。

（周郷）

◇講演◇

大石さんの話の前に

周郷博



環境問題——日本人の冷たさ

大石武一元環境庁長官が十時に確実に来るという電話がきのうありました。で、ぼくが二十分ぐらい雑談をします。私は今年のこの集まりで幼児教育と縁を切ります。解放されます。それで私にとっては最後の講習会の最終日、環境の問題に来るわけです。この四日間の計画は、天のめぐみのように、たいへんうまくいっていると私は思います。

今度のこの催しの最初の二日間は sujestion というか、考えるためのヒントを与えてくれたんですね。きのうはちょっと風変りな人が来て sujestion という、暗示を与えてくれる、考えるヒントというよりも、少し間抜けに見えるような、まじめな同憂の士がきのう話してくれたわけです。

で、四日目の今日、大石さんが話すのは、どういうことを話してくれるのかわからないけども、大石さんはぼくは東大でないということは知っていましたけども、帝国大学でもない方がいいと思っていましたけど、東北大を昭和九年の卒業です。医学部です。で、どういう話をするにしても大石さんという人は誠実な人です。自民党の長官というのは大臣のことですがイギリス、フランスでは環境大臣といっている。日本はまだ長官と言っている。こんなにひどい公害国であるにもかかわらず大臣ってものを置いてません。環境大臣というものを、ヨーロッパのどの国でも置いてます。

その環境問題をどういうふうに話すかはわかりませんけども、教育というのは、この環境の中で行なわれないことは確かですよ。学校というものをたくさん作れば、幼稚園をたくさん作れば、どんなに環境が汚染されていても教育は成り立つというもんじゃないんです。もっとわれわれは環境のことを考えなきゃいけないと思うんです。もちろんこの問題の中には四日市のように、企業家の思い上がった、これは日本独特の考え方なんでね、ドイツの人が書いています。日本人はすぐそばに病気の人がいても何も感じないで済む特殊な国民だそうだね。どんなに口でうまいことを言っても、そういう所がわれわれ全部の中にあります。ぼくは、なんか日本の伝統と関係があると思うの。戦争に勝てばいいんで、死のうとどうしようと、そういうことにかまっておれない。勝てばいいんで、これは日本独得です。それは、人を失って済むもんではないのに、われわれ自身の中にすぐ隣の人が病気で死にかけていてもなんとも思わないという精神を持っています。医者だってそうです。死のうとどうしようと、ちゃんと金取ればいいと思っています。

今度ヨーロッパに行って、タマニエ君というあいの子の青年と（彼は元気がよくて、ヨーロッパにたくさんの友だちがいて、果物なんかぼくに買ってくれたりして）たいへん楽しくしていたんです。ところがスイスへ行ったら、彼はついにおなかが痛くてしょうがなくなっちゃって、夜の一時ごろ、ぼくはお医者さんを頼みました。そしたら一時ごろ来ましたよ医者が。ぼくは隣りのベッドから見てたんですけど、この医者は、夜あんなに遅いのに、実に親切なんです。病気になっている人に呼びかけ方が違うね。日本の医者はふんぞり返っているでしょう学校の先生とよく似ているのよ（笑い）。それで非常によく見てくれるの。そして三十分ぐらいよく見てそして最後に注射しました。だから診断も間違ってなくて、その注射一本でスッと完全に直りました。ただしお金は高かったんだなあ。日本のお金だと一万三千円ぐらい取られました。それは外国人だからかもしれないけれど、ただ医者というものが親切なのに感心しました。日本人にはああいう精神がないように思いました。つまりヒューマンタッチというものは日本人にはないですよ。勉強した人ほどそれがないのね。

だからぼくは環境の問題などにしても、これだけひどい状態なのに、日本は平気のへいざでいられるのね。だからもちろん経済の問題と関係があります。政治の問題とも関係あります。中国の人は考えれば考えるほど愛情のこもっているようなことを言いますね。田中総理がハワイでニクソンと会うわけですね。

ソ連はソ連で中国と接近することを気にしているわけです。少なくともそういうことで、最近とみに世界中が、アメリカとソ連が中心で動いているなんてことはなくなってきました。今度三極構造なんて言いますけど、中国がもう一つの大国になるってことは私はないと思います。ソ連、アメリカとはちがうわけですから。私は多極構造というよりも、世界中の国民が自主性を持った状態ができるんじゃないかと思うんです。中国がその状態で欲求しているのは、日本とアメリカが交渉しても、当然必要があれば交渉してもいいんですけど、日本が独立国であるという条件のもとに、つまりアメリカ一辺倒でアメリカにおんぶしているというんじゃなくて、もっと悪いことばで言えばチュー政権のように国であるという条件があれば、どの国と交渉してもいいと。なんと大国ですか、その態度は。そのことを考えてみればわれわれは、二十五年の惰性のように行っちゃいけないわけです。

独立心

そのことを考えると、われわれ自身の中に独立心を持たなきゃいけないわけです。文部省がこうやったから、私はまあ、それに合った線でやっていますといういいかげんな線で行動しちゃいけないんだと思います。あのね、文部省はね、今の子どもたちが、三十歳になった時の幸福を保障しているんですか？保障しないでしょ。人生の生きがいを保障しないでしょ。

しかしね何も文部省にさからう必要はない。文部省がやるべきことはやってもらいたいわけですし、協調していいわけで、今までのように天皇制の次の状態、占領軍に変わったような形での文部省依存をするべきではないと思うんです。批判すべきことは、イデオロギーではなくてちゃんと批判できる心をみんながもたなくちゃいけないんで、独立心を教師たちが持たなくちゃいけないし、そしてこれから育っていく子どもたちに独立心と共に世界の市民として生きてゆけるように育って欲しいと思うんです。それはこのような惰性でやっている教育ではできないと思うんです。今度ロンドンに行ったのも、そのことと関係があることですけど、ちょっと爆発的なこと、ヨーロッパでは非常に重要な問題なんですけど、それをあとの時間で話そうと思います。

義務

でも簡単に考えても、戦後テレビがこんなに普及して、印刷物、子どもの本なんかこんなにたくさん出て幼稚園がこんなに

たくさんできて、大学生が幼稚園の生徒の数くらい増えたけど、何がよくなったんですか。よくなったものは一つもないでしょ。なんか間違ったものがエスカレートしてこれ以上エスカレートしたら、悪い状態がもっととり返しのつかない所へ行っちゃうわけです。だから今のような学校が増えるということを考えちゃいけないわけです。もっと質の違うことをしなくてはいけないんです。これがわかるでしょうか。私は教師だから一生懸命やりましたということは、ちっともその人が人間として生きたという印にはならないんです。世間的には合っているんです。世間的には責任を果たした。だから、責任というのは、他の人との関係、特に日本で言えば自分より上役の人との関係で責任というものがあるのです。他の人との関係です。

義務というのは人がいなくたってやらねばならないところがあるんです。そういうものが日本人にはないと思います。いつも上司、上役、世間との関係で責任というのを適当にごま化しながらやっているんです。世間がなくったって、上役がなくったって義務というものはあるわけでしょ。今、シモーヌ・ベイユが言ったように人類に対する義務を考えるべきです。公害問題なんてまさにそう思うんです。大石さんの気持ちなんかそれに合うと思うんです。人類に対する義務というものを感じるべきなんです。死んでも離れられないもんなんです。そしてそれを、義務を果たしたということはその人の生きがいであり、生きた意味だと思うんです。ぼくは、そういう気持ちが動いてくると人と人との関係ももっと、…関係が楽になると思います。個人的な肩書きとか地位とかに責められなくって済むようになる。人間が一緒に助け合って、それぞれの人間の義務を果たしているという、喜びの中に入ることができるわけですよ。

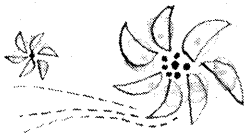
めざめた人

大石さんは本当にぼくはなんとなく好きです。顔もいいわね（笑い）誠実ですよ。政略ではないんですよ。今二つの言葉を使いましたけど、ぼくらの心の中にも政略というものはかなり巣食っています。これは捨てなきゃいけないと思うんだ。政略というものをわれわれの心から捨てて、人におべんちゃらなんか言ったりして、一生をすごすむなしさというものを捨ててみたいと思います。で誠実というもので生きてみたいと思います。大石さんが来たあとは、その話と無関係な話はできません。そうでしょう。人は助け合っているんですからね。光の干渉みたいなもんです。ここに光があって、ここに元の光があれば、ここでひとつ元の光は影響を受けるわけですよ。

あとこの夏に話した大石さんを含めたすべての人の話をまとめて、私の話をしてみたいと思うんですけどね。これちょっと大変なんです。たぶんうまく話ができないと思うんです。そいであんまり話をうまくしない方がいいんじゃないかね。(笑い)あんまりよくしちゃうとそれで終りになっちゃうのね。しかし、それから今度、それが終わった後で心の中で対話が始まったらいいのね。

私は四日間ずっと思っていたんだけど、これちょっと聞いて下さい。私はめざめた人でありたいといっも思っている。でもね、めざめた人であるということは、つらいことなんだと感じるし、めざめた人であるということは、そう簡単にできないんだ。誘惑が多くて、そして怠け者で、でも私の気持ちには、今度ロンドンに行って帰ってきて、なおその気持ちが強くあります。私はめざめた人でありたいという気持ちが激しくあります。それは先人感とかうぬぼれがあったのでは、とてもめざめた人にはなれないわけなんです。お金さえもあり過ぎてはいけないんです。

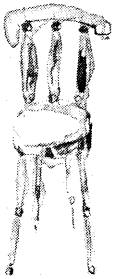
今十時になりましたけど。十五分遅れて確実に来ると思いますから、十分ぐらい中断しているのはどうでしょうか。ここはもう、形式的にお祈りしてなさいというのはだめだね。でもぼくはね、やっぱりお祈りしているとかの時間が、瞑想しているとか、日本にはないのね。お祈りというのも、実に形式的で、実にわがまま勝手なものです。お祈りというのは、だれか神様に頼んでさ、わがまま勝手にご利益をもらいたいなんて。そんなの神様が聞いているわけないですよ。(笑い)そうじゃなくて、自分の心をはっきりさせるということです。不浄なものを払いのけるということです。先入感をなくすということです。本当のことを受け入れる器になるということです。〈拍手〉



◇講演◇

私の所感

大石武一



ご紹介をいただきました大石でございます。幼児教育に直接関係のあることはお話できませんが、私の思っていることを少しお話しようと思います。

皆さんご存知のように、私は尾瀬の自然を守るために努力をいたしまして、仕事をやめましてから先日、家内と孫を連れまして尾瀬に行ってまいりました。尾瀬は、学生時代に行きたかったのですが、私、学生時代はちょっと野球をやりすぎまして体をこわしました。そんなことで行かれなかったのですが、在職中に一度まいりまして、それから先日、まいったわけでございます。

尾瀬の自然を守るために大変努力をいたしました高野さんという人が、非常に尾瀬を愛しまして、親の代から尾瀬に山小屋をもっていた人ですが、山を歩いていてなくなりました。その人の一周忌ということで私もおまいりにいったわけです。

ところが私は大変感心いたしました。尾瀬は、あれだけ有名で、多勢の人が訪ねる所でありますのに、ごみが一つもありません。努力をすれば、このようになるものかとつくづく思ったことでございます。

公害の原因として、大企業のせいだとか、経済成長偏重のせいだとか、いろいろの事がいわれています。しかし私は、やる気になれば決して防げないものではないと思います。環境庁でも、人員を増やしましてこの問題にとりくんでおります。そしてたしかに効果もあがっております。公害の原因をなした者を法律で罰するとか、いろいろ考えられますが、結局は公害のもとを作りますのも、防ぐのも人間であります。一人一人の意識の改革という事が行なわれれば、これは決して不可能な事ではないと、私は深く確信して今後も行動していきたいと思ってお

ります。

私は先日、銀座の歩行者天国という所へ参りました。ふだん車の行ききの激しい銀座通りを通行止めにして、いろいろな店が出て、大きな傘のかげで人が休んでいたり、なかなかよいものでした。ところが、紙くずが非常に多いのです。すぐに責任者を呼んで聞きましたところ、あとで私たちが掃除をするから、というのです。私は、そんな事ではいけない、自分で出したごみは、自分で始末するのがあたり前だ、すぐに紙くず入れを備えるように、と申しましたが、その後どうなりましたかわかりませんが、ともかく、誰かが始末するだろう、このくらいの紙くず、などという事がつもりつもってこういう事になるのです。

ごみ一つない尾瀬の事を考えまして、やはり一人一人の心構えで、きれいな所もよごれてしまうという事を、今さらのように思いました。

次に、私が戦後外国へ参りまして、大変印象に残った事がございます。

それは、プリーズとサンキュー、それからユー　アー　ウェルカム、この三つの言葉でございます。いつどこでも、大変自然に、小さな子どもの口からもこの言葉が聞かれた事でございます。たとえ親しい間柄でも、また反対に知らない同志でも、この三つの言葉をかわす事によって、人間関係が非常になごやかになると思うのです。これは日本でもこうありたいと、思った事でございます。

しかしこういう事は幼い時から、自然に身についてこそいいのであります。どうぞ幼稚園で小さいお子さんを教育なさいます皆様方に、この事をお願いいたしたいと思います。

たとえば、私の家の近くに小学校がありまして、毎朝、朝礼のような事をしております。このような時に、〝ごみはすてません〟とかこの三つの言葉を、シュプレヒコールのように、子どもたちにいわせたらどうでしょう。このごろの子どもですから、シュプレヒコールなどという事は得意だと思いますが……。

最後に一つ付け加えたい事がございます。戦後、どうも私などが見ておりまして、親が子どもに遠慮をしておる、あまり時代が変化したために両親の自信がなくなったせいか、おさえるべき所をおさえていないような気がいたします。これではいけません。両親の気持ちがぐらつけば子どもも何となく不安を感じるでしょう。将来親となられる皆さんも多いと思いますので、この事をお願いして、この話を終わりたいと思います。（要約）

◇講演◇

講習会を終わって

周郷博

はじめに

四日間、私が思い悩んできていた教育、特に、出発点の幼児教育について、さっきの大石さんまで含めて、私が言おうとしていることは全部でてきたと思います。そういう感じがするでしょう。だからもう、演出がよかったんで、あとは話す必要がないんです。そしてどういうわけか四人ともおのずから一つの共通の問題にふれながら教育の焦点をはっきりさせることになったと思うんです。

大石さんも、言葉の問題が出てきました。子どもが最初に聞く言葉がいかに大事かということ。そしてその中に地球全体を含んでいるものの考え方というのが、その最初の言葉の中に、すでに入っているというあれね。そういうことも一日目の外山さんの母なる言葉と対応して出てきました。

大きな時代の変り目になると教育の専門家はもはや役に立たないんです。教育の素人の考えが全部いいわけじゃないけれども、教育の専門家という閉じ込められた世界にいる人にはわからないことがたくさんあるんで、教育の中にもぐり込んでしまった人たちではもはや、この壁は破られないんだということです。今回四人の人達が教育の外側にいて、われわれがどこでどう壁を破るべきか、どこで教育をもっと広い展望を持つ所へ行けるかと考えていたところ、教育の外にいる人によってわれわれの中にあった自分では破ることのできなかった壁が破れてきているということを私は感じます。

大石さんの話から——意識の改革

先ほどの大石さんの話で、私たいへん感心して聞いていたのはね、日本は本当にゴミだらけの国です、目に見えるゴミだけ

じゃなくて、精神的なゴミも多くて、あのゴミの中にうもれていくような状態にわれわれの心はなっています。しかし、大石さんのあの optimism 、やれば日本の自然もきれいになると確信していることは、私感心しましたね。だから最後に大石さん、明るい心で生きなさいと言いましたけれど、明るい心にもいろいろあるんでね。これなんか日本語じゃちょっと言いようがないから、optimism ですよ。やれば、何年かたてば日本の自然はきれいになる。きれいな川や小鳥の声が戻ってくれば日本人の心もきれいになるだろう。そして天皇制の時代とは違った意味で人類につながるような、人類公共のものを大切にして、人類との連帯感、自分一個だけの問題じゃなくて今とは変わった意識の革命が生まれてくるだろうと、大石さんが信じていることは、私には大変救いになるように感じられました。

最初に大石さんは意識の改革と言いました。役人はいくらたくさん作ってもだめなんだ。それから法律で罰金をとってもだめなんだ、という例をあげましたね。やっぱり住人というか国民の意識の改革が、別のことばで言えば意識の変革が必要なんで、制度とか法律というようなものも助けにはなるが、基本的なものは意識の変革なんだ、というふうに言われました。それから、大石さんが最後に言われました両親の自信のなさ、もう明日はないような顔をして生きている両親が多いわけだけど、やはり両親も含めて意識の変革だね。それを僕は連帯感と言ってもいいと思うんです。愛ということもうまい言葉で大石さんらしく言いましたけれども、公共道徳、公共の社会の共有物をあるいは人類の共有物を、まさに環境会議の言うかけがえのない地球だという問題になるわけです。これがだめならば全部だめになっちゃうわけですから、自分のことばかり考えてもだめなわけです。日本の自然環境も、それから精神的な環境もみんな自分のことだけを考えている限りよくなる望みはないわけです。ぼくはその意識の変革ということが、現在の家庭から、地域の住民、それからもちろん有力な地位にある企業家から政治家から、全部含めて意識の変革を行なうことが教育の核心なんだと思います。それをぬきにした教育というものは、なくてもいいというよりも、あれば有害だという教育だと僕は思います。

崇高なもの

ちょうどきのう学士会の月報を送ってきていて、そこにも大石さんが、昼食会かなにかで話した、ストックホルムの環境会議かなにかで考えたことがでていましたけれど、その中で、人類は今やイデオロギーとか企業家の損得とかいうものを離れて、かけがえのない地球という、この人間の環境を本気で考えるよ

うになったというのは、崇高なものだと言っているんです。ぼくらの心に欠けているのは、この崇高なものなんです。テレビもいっぱいあるし番組も詰っている、本もたくさん出版されてるし、大学もたくさんある。幼稚園もたくさんあるけれど、しかし、われわれに崇高なものがあるでしょうか。子どもを子どもらしくしていくものは、この崇高なものです。

中国の毛沢東の文化革命以後に言っている言葉はもちろん前と連続していますけれど、絶対無比の精神と、人民に奉仕する精神というね、毛沢東が中国の若者たちに、もちろん大人たちにも教えていて、そして実行されていることなんですけど…。そういう絶対無比なんて禅みたいに思っていちゃいけないんです。絶対無比だからといって、いい気になっちゃいけないんです。絶対無比の精神と人民に奉仕の精神というのは、それは哲学ですけれども、同時にそれは日々の行動にならなくちゃいけないんです。ぼくはそういう崇高なものは、あらゆる教育の中になければ子どもは育つことはできないんだと思います。

愛

大石さんまで含めて四人とも相談したみたいにちゃんと首尾一貫しているでしょう。だからもう、そこに付けたすことありません。ないんですけれども、だからなおのことぼくは言いたいんですけれど。これはもう、つけたしだと思って聞いていただいていいんです。

意識の改革ということが今のヨーロッパで本当にまじめに起こっているということを、このあいだロンドンへ行って、ルネマリパリーさんや何人かの人と一緒に講演会に行って、そして、みんなで興奮して抱き合ったりしました。日本だとなんだか変になりますね。ぼくは愛というものは、日本人には最もわかりにくいものだという気がするし、今の人にはなおわからなくなっていると思います。やっぱり愛というのはヨーロッパで、清潔な、キリスト的な情熱を根拠にしてあるもので、私はああいうきれいな人に抱かれて、“My dear professor”と言ってあいさつされたのは初めてですけれど(笑い)、しかし実にあとの気持ちがいいね、ことば以上でした。

それから、しつけのことですけれど、スイスでぼくはくたびれてしょうがないから、一人でコーヒー飲んでました。そばに男の人がいて、そばに四歳か五歳の女の子がいましたから、たまたま持っていたおみやげを、その女の子にあげました。そしたらその男の人が、あんたどこから来たのと言いました。そしたら私は日本へ行ったことがあって、歌舞伎座も知っているし、イベット・ジローという人と友だちで、私はベルギー人だけど帰らないで世界中を歩いているんだと言いました。大阪も知っ

ていたし、鹿児島も知っていました。

いろいろ話をしました。そこにもう一人女の人がいましたけれども、その人はそうきれいな人じゃなかったけれど（笑い）。そのうち女の子のお母さんが来ました。何か用事をたして帰って来ました。お母さんが帰ってきたので子どもを含めた四人が帰って行きました。

しばらくしてから、その女の子は、あのおじさんにあいさつしてきなさいと言われたと思うんだ。そのかわいい女の子は帰ってきてぼくのほっぺたに接吻しました（笑い）。ぼくは驚いたなあ。興奮したよ（笑い）。だってplease と thank you と you are welcomeという言葉を小さい時に教えなさいというのと同じように、ある人が親切にしてくれたらね、やっぱりちゃんとあいさつしなさい、それもきまりきったあいさつじゃなくて、むこうからちゃんと来てね、あんなにかわいい子に…。それでぼくはえらく興奮しちゃったんで、おみやげの中に、日本のこんな紙が入っていたの。それと、伝票と間違えてボーイさんに出してね、これいくらか、これいくらかってきいたの、ボーイのやつ驚いてね（笑い）、そしたら伝票は下に置いてあったよ。あんまりうれしかったのでね（笑い）。

だからね、やっぱり清潔な愛というものは、人間を本当に変革してくれるものだと思います。あとくされがなくてきれいなね。そういう愛が日本にはまさに少なくなっちゃったと思います。人は無感動です。無気力です。中国の人は、ヨーロッパの人とは違う愛、キリスト教的な情熱と愛というもので動いているのだと、イギリス人は見ています。中国にはそれはありますね。しかしわれわれにはそれが本当になくなったように思います。

自然

そしてさっき大石さんが言った通りだと思います。きれいな自然がなければ、日本人が愛というものを学ぶ手がかりがないんですよ。でヨーロッパには、きれいな自然が残っています。リスボイさんという亡命ロシア人で、アメリカの大学の先生をしている人とロンドンで会いましたけど、あのこと思い出になるなあ、ロンドンはどこへ行っても美しい緑も、広い場所も残っています。それから木もきれいに立っています。あれは遊牧時代から美しいあいう緑の草原があったわけです。イギリス人にとってノスタルジアですよ。そういうノスタルジアをこわさないで持っているんです。イギリスの歴史と切り離すことのできない緑の草原です、それが大都市の中に残っているんですよ。で、広い場所があるわけね。そして、そこを人間の子どもは自転車に乗って走っちゃいけないけども、犬はそこを走って

いいということになっているわけです。日本みたいに、犬も全部つながれているということはありません。犬も全部自由にしています。日本じゃ犬は全部つながれているでしょ。で泥棒よけかなにかで。だからおやじさんもみんなつながっているのに等しいんです(笑い)。子どもも幼稚園につながれている犬のような感じがしますよ。もっと放したらどうでしょう(笑い)。放す場所が今ないのが困るんですけども。

そして、今度最初に行ったのはデンマークでしたけども。デンマークは白夜でした、朝二時ごろから夜が明けて、十時ごろまで明るいわけです。しかしあのデンマークの農業大学へ行ってprofessorと話して、ヨーロッパとはこういうもんだと思いましたね。デンマークでは非常にこう、日本のビニール・ハウスとは違うんですけども、完全な温室を作って、花をたくさん作ってドイツやイギリスに輸出しているわけです。そしてそのprofessorの言うことに、花というものはかって富裕な家庭で楽しまれていたけども、今やすべての人が花というものを各人の家庭に持たなければならなくなってきている。工業化が進めば進むほどそういうものが心要になってきている。

古いものを生かした都市化

ヒットラーが戦争をしたあと、ヨーロッパ共同体の人達が一方では工業化が進み、都市化が進むにしたがって、都市に住んでいる人はみな、彼の言うには、田舎から来た人だというんです。だから田舎、地方に対するノスタルジアをみんな持っているはずだと。

そして都市化の問題なんだけど、都市が花で飾られて、イギリスのように草原もあって、そしてなんか、古い時代から住んでいた田園的なものに対するノスタルジアを一方でちゃんと満たすことができるようになっていて、そして都市化やなんかから来る精神的砂漠化を防いでいるわけです。

日本では、そういうことを全然やってないように思います。わずかに盆栽みたいなものをちょっと置いている程度です。しかしあれはノスタルジアを満足させるでしょうか。ノスタルジアよりも趣味化になっちゃいますよ。なにか狭い趣味化、細々としたみじめったらしいものになっちゃいますよ。もっと堂々と、われわれがかつて生きてきた大自然の中に、ヨーロッパならかつて放牧民族としてすごした時のノスタルジアが都市化と工業化の中にちゃんとたもたれているわけです。

そういう過去のものを、ヨーロッパは都市化が進んでいて第二都市を作っていますけど、パリもロンドンも、古い建築物はみんな残しています。日本みたいに、やたらにこわして、そこに新しいものを建てちゃうようなことはしてません。古いもの

を大事に残しているわけです。そしてそれと違った、今まで貧民街であった所をきれいに建て直すとか、もっとそれとは違った所に第二都市を作っていて古いものは古いものとして残している。そういう古い建物があるということも人間の心が不安定になっていくのを守ってくれています。われわれの心から古いものを全部取ってしまえば不安になるよりしょうがないでしょ。

前頭葉

ヨーロッパには意識の変革が明らかに起こっている。今までとは違う時代に生きていかねばいけないんだと、だからこそ過去を大事にしなければいけないんです。これは中国にもあるんです、中国はただ新しくなったわけじゃないんです。過去を大事にしていくことができる状態と、未来に対する希望を持つことができる状態になったんです。過去のものがなければ、そこに母国語も入れてほしいんです。お母さんの言葉というのは過去からずっと続いている言葉です。母なる土地というのも、それがなければ未来は考えられないわけです。ぼくは脳のことを話そうと思っているんだけど、時間がなくてできません。

そのことでロンドンのルネマリパリーさんが、自分の部屋にテイアール・ド・シャルダンの言葉を大きく印刷したやつだけど、大きく書いてあったんです。そこにあの月から見た地球も書いてあってね。僕はあの言葉好きだったんだ。だから、昔から知っていた人とめぐり合ったような感じで、ルネマリパリーさんの家にいたわけなんだけど、二日間過ごしました。なぜ早く帰るんだと言いましたけど、日本人は、ともかくワサワサ歩いて帰っちゃうんです。だから停年になったら行こうと思います（笑い）。

あの言葉はテイアール・ド・シャルダンの言葉で、いろんな生物が地球上に生まれて、哺乳類の中で考える人間のできてきたその時点の地球の過去のただ一つの状態を表わしています。実に詩なんです。詩であって科学なんですけれども。ぼくは好きだなあ。それが脳というものであって、同時にそれは前頭葉と考えていいわけです。しかし日本では今、あやしくなっています。水野君も言ったでしょ。前頭葉というものは、死とか、死というものを作るものを考えるのも人間ですよ。死というものとの緊張関係で生というものの意味を発見するのも前頭葉の働きです。過去との関係で未来を考えずにいられないのも、前頭葉です。ところが、この前頭葉を子どもたちは当然持っているはずだけど、日本みたいに、過去は全部こわしちゃって未来はないという国では、前頭葉の働く場所はないでしょ。そうすれば日本の子どもたちの心はどうなるでしょうか。われわれが、さっき大石さんに感心したのは、本当に日本はどうにもならな

い状態みたいですけど、われわれが何十年かやっていれば日本の自然がきれいになるし、世界の市民としての日本人ができていくんだという、希望を大石さんのように持ちたいと思います。

イワン・イリーチのいう学校

もう時間がありませんが、最後に言います。

これは、パリで探してきた本です。これは去年ロンドンのティアール・ド・シャルダン協会で、このイワン・イリーチという人が来て話をしたんですけど、それがのっている本です。今まで学校というものがでてきましたけど、もはや学校のない社会を作らねばいけない。学校というものはhumanismをだめにするunhumanなものであって人間を人間らしくする制度になりさがってしまっているわけです。capitalismの社会の勝利者を作っているだけであって、大石さんとの関係で言えば自然を荒らす人間を作っているのが学校なんです。だから学校というものの中に教育があると考えてはいけないんです。

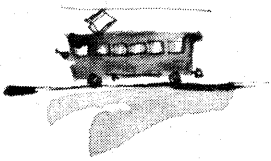
中国はこれを少なくしようとしています。大学も今の状態であってはいけないんですね、これをやめるべきだと思っています。直接の問題としては、学校みたいなあの時代遅れの、悪を犯してきたこの学校というものを、幼児の世界までおろしてくるものではないんだというわけです。学校らしくない教育を作っていく。それを別の言葉でいうと、これも説明がうまくいかないと思います。人間が一緒に生きるということより、生きることを学ぶという学校に変えなければいけない。それには自然というものがあって一緒に協力して助け合っている。一緒に働いているという正しい共同体が生れなければならないんです。

それは全く今までの学校の概念と違うわけなんです。このイワン・イリーチの考えは、ヨーロッパに旋風を起こしている考え方です。彼が数人の人たちとメキシコのクエルナバカというメキシコシティーから一時間くらいの所にあるんですけれども、そこでいろんな人達と集まって第三世界のための新しい社会ということを考えていた時に出てきた考えで、学校のない社会を作らねばならない。といって学校というものを全部否定しているわけじゃなくて、学校でやっていたものは残していいわけです。これはちゃんと選択をしなければなりません。それから、学校でなくて家庭の中やなんかでやっていた、過去のいいものを拾い集めてそれを作り上げていかねばならないんです。少なくとも、学校という形にはまっていれば、そこに教育があるという考えは捨てなければならなくて、学校というものをなくした社会、そこにこそ本当の教育があるという本なんです。

「めざめている心を讃美する」と「未来を開発する」

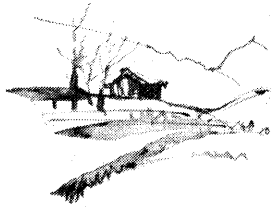
もう一つ、彼のもう一つの本が“Celbration of Awareness”という本だけれども、それはぼくが今日、大石さんが来る前に言った、宗教的なものも含めて、科学的に物を考えるといった意味を含めてawarenessっていうのは、めざめているということです。「めざめてる心を賛美する」という本をもう一つ書いているんです。技術が進歩すれば幸福になるだろうとか、人がかりの生き方じゃなくて、人間として、感覚、それから直観力がみんなめざめているという人間を讃美しています。そして来年イワン・イリーチが出す本は、「未来を開放する」という本です。学校というものは、今の幼稚園も含めて、学校というのは明治の成功をまだ夢見ていて、あの調子で、もっとエスカレートしていけば、もっと大国になるだろうと夢見ているけど、これは害の方が多くなってきているんです。学校というのは、子どもたちは当然未来を考えることができるはずであるのに、未来を考えることを閉じているのが学校である。したがって、彼が来年出すことになっている人間に閉じられている「未来を開放する」のが教育で、学校は未来を閉め出している所だ。その意味ではみなさんに自信を持ってもらいたいと思うんです。学校制度に合っている方が幼稚園の格が上だなんて思うべきじゃなくて、学校とは違う型やぶりなものを作っていく。学校はもう死骸なんだ。人間をだめにしている。ここで新しいもの、学校らしくないものを作っていくんだという自信を持ってもらいたいんです。そういう自信を大石さんのoptimismで持ってもらいたいんです。

この他にぼくはちょっとメモを作ったんだけど、これでやめた方がいいと思うのでやめます。これで幼稚園の園長を四年間やってきました、この幼稚園長としてお目にかかるのは、これで終りです。来年からは、もっと違った、もっと中身のある人間として、みなさんにお目にかかりたいと思います。どうもありがとうございました。〈拍手〉



座談会

環境とこころ



周郷博
ほか

環境とこころ

周郷　環境とこころ、環境と教育といってもいいんだけれど…。これは実際は大きな問題なんだな。各人が一日といえども離れる事のできない問題だな。そして地球的問題です。誰か口火を切って何かいってください。

母A　三年前になりますけれど、三年保育に入って初めて、入園式の前に母親の集りがありました時に、ちょうど春の雨だったんですね、その時。それで周郷先生が、春の雨が草木にしとしととしみこむように、物事が本当によくわかるという事が、今の時代にはなくなってしまったねと、お喋きになったのが最初に印象に残る、印象に残るなんていうなまやさしい事じゃなくて、ぐっとまいりまして、それからこの三年間、そういう事を根本に考えたいなとその時思ったんです。実際にはだいぶがさがさと過ごしてしまった事もありますが……。

環境とこころって大変大きな題でわからないんですけれど、子どもの心にとって、まず身近な環境は親だと思います。ですから春の雨が本当にしっとりとしみこんでいくようなわかり方を、子どもが一つ一つの現象でうけとめていけるようにするのも、親の態度いかんにかかってるんじゃないかな、とその時思いました。それは忘れた事がありませんでした。

でもたしかにこの幼稚園で、そういう傾向に子どもが育ったという事は非常に感謝しております。

周郷　今の話でぼく、思い出しましたけれど、春の雨っていうのはまだ芽が出てくる前の草に降る雨なんです。芽生えの前、根にしみこんでいくわけですよ。これがなければ、この一年枯れたままですよ。

しかし、ぼくが幼稚園の園長をしてる間に、たとえば石川啄木のいったように、子どもたちが巨木のように育つような環境を作る事はできませんでした。失敗の連続でした。そして春はやめます。幼児教育という事で、教育のどこが間違っているかという確信を、身をもって感じましたから……、もっと大きなスケールで、教育というものが人類全体にとって何であるかを、国際的な規模で考えたいと思うもんですから、中国へも、ロンドンへも二、三ヵ月行ってきたいと思います。

しかし、この幼稚園ではぼくはそういう環境を作れませんでしたが、幼稚園だけが環境の全部ではないんですね。さっき偶然アメリカの、だんなさんは電気の会社に勤めていて、その奥さんで、心理学をやっていてドクターをもってる人が来ていましたが、アメリカではドクターとるのやめるんだそうです。ドクターが多すぎるから。彼女もいってましたが、アメリカは広い場所があるしね、隣の人は同じ人じゃないし、日本みたいにくらべようがない、違った人がいるわけ。そしてやっぱり、結婚して家の中にとじこもっているという事は、不幸なんです。

彼女の息子っていうのも、末の息子はたった一人でアメリカにいて、だんなさんは彼女を送って日本に来ていて、一人の息子はロンドン、もう一人の息子はパリにいるんだって。世界中にちらばって、そしてお互いに尊敬しあっているんでね。これでいいじゃないか、何もずっと一緒にいる事はないじゃないかっていってました。ぼくは、おそらくそういう生き方が、人間にとっても幸せなんじゃないかと思います。

ところが、だんだん話してる内に、〝日本の人たちは保護されすぎてる、そして家の中に入りすぎてる〟っていうんです。これはぼくがいったんだけど、もらう事ばかり、田中内閣と同じで、うまく金もうける事ばかり考えて、与える事を考えてないから、日本のお母さんたちも自然にそうなりますよね。家の中にもぐりこんでて、何か幸福をもらおうと思ってる。彼女は、それはだめだっていうんです。やはり、結婚しても勉強しなきゃいけない。そして報酬の伴なわない、病気で困ってる人やなんかの所へ行って、ボランティアとして仕事をやらないと幸福になれないと彼女はいいました。

家庭のお母さんも子どもにとって重要な環境です。最初は、お母さんのお乳が全世界であった。そして次にお母さんを通じて、まわりの環境というものを、ただ環境というものは解釈がつかなきゃ意味をもたないのであって、お母さんの解釈を通じて意味をもった環境になるわけです。お母さんが欲ば

りであれば、まわりは欲の対象にしかなりません。そういう事も全部含めて、この幼稚園でも、山へ連れて行こうとかいろいろ考えましたけれどもね。お母さんたちともよく話し合うチャンスだと思って山も考えました。それから子どもも山の中の本当の美しさや、さびしくなって日が暮れた時に一緒に星を見るとか、いろいろ考えましたが、思うようにならない事が多すぎました。

しかし苦しんだって苦しんだ甲斐があります。苦しんでもへこたれません。苦しめば苦しむほど、心も、物事を見る目も、拡大していきます。この四年間の苦しみは、ぼくにとって感謝です。

名誉・成功・グローリー

母B　園長先生も今年度いっぱいですし、皆さんも何かおききになりたい事をどんどん、ききだめっていっちゃ何ですけれど、この〝環境とこころ〟という題にはずれてもかまいませんから、おっしゃってください。

母C　今のお話の続きなんですけれど、ある程度家庭に入って子どもが成長すると仕事がなくて、趣味に生きるという事もいいんですけれど、今、実際、病院で福祉その他っていうと本当に人がなくて困っているんですね。

周郷　いないんだよ、たしかに。

母C　そして実際には、収入が伴なうか、名誉のある事でないとやる人は少ないんじゃないんでしょうか。それを名誉を考えるような考え方ができていればいいんですけれど、今のところまだそれができていないっていう事がこわいと思います。

周郷　あなたが今いいだしたからいうんだけれど、今、日本人にとって、名誉って何だろう？　今、ないんじゃないかな。英語でいえばグローリーがないんじゃないかな。

母C　目標ってものが、昔はあったと思います。

周郷　そりゃ天皇制時代の価値観は、ここで進化しなきゃならないんですよ。

母C　戦争中、あの時代はあれで、全体が生きる目標があったわけですね。

周郷　名誉ある、名誉ある決断とかね。もう一つ、前の学長の蠟山先生が〝周郷君、日本人にとって、成功するっていう事は何なのだろう〟といわれた事を思い出します。

東大へ入るのは成功でしょうか。成功っていうのは、何て短距離でいやらしいものになったんでしょう。もっと人の一生涯というものを考えた時に、この時代に成功というものは何ですか。一人の人間が成功する、その人の価値を実証したということ……。今の日本では欲にかられて、身近に考えすぎています。そして子どもをだめにしています。

人の一生涯って事を、二十一世紀からもっと遠い地球の未来っていう事を、考えてごらんなさい。親子が信じ合って生きて、そして死に近づいた時、おれはやるべき事をやったという成功を味わわせるにはどうしたらいいでしょう。お茶大附属幼稚園を出たなんていう事は、問題じゃないんです。お母さんの本当の願いはそこにあるんじゃないでしょうか、政府がよく、公害の長期ビジョンなんていうけれど、われわれはああいうのに関係なく、長期ビジョンをもって教育を考えなきゃいけない。

母D　いわゆる、一つの目的があるとおっしゃいましたけれどね。人間の領土的野心というか、洗脳といった感じをうけるんですけれど……。

周郷　ま、日清、日露の戦争で成功をおさめてますね。そしてそのころの日本人は素朴でした。今みたいにごう慢じゃなかった。二つの戦争とも、勝つと思ってやった戦争じゃないでしょう？　第一次世界大戦、そしてそれからあとは、勝つという事を考えてやったでしょ。よごれてますよ。もし本当に戦争をやるんなら、北ベトナムの人たちのように、勝つなんて事は考えないでやらなきゃ、グローリーはないですよ。

それは人生においても同じです。この手で勝とうなんて事はよごれてますよ。名前を売ろうなんて……。しかし日本人に多いんだな。勝とうと負けようとやらなきゃならない事はあるんです。

神秘的な子ども

母D　現在世の中が多様化され、その中でなかなか自分の目的っていうものを生み出すのがむずかしいのです。子どもにそういう生き方をさせるには、まず母親の勉強が大切だと思って、私は今年三年保育に入れていただいて二期をすごしたわけですが、先生のお話を何回かうかがって、何か少しわかりかけてきたような気がしますが……。

周郷　あのね、ああいう、新聞に書いたものとか、テレビとかはだめなんだよね。ぼくはこう思います。本当に大事な事は、言葉ではいえないものなの、そうでしょ？

今日は、子どもたちに、神様っていう言葉を使おうって気がしたんだ。神様ってものはわからないものなんだ、でも、それがなければぼくは生きてはおれない、説明つかないものなんだっていいたいと思ったんだけれどね。でもあのチビにいっても、と思って…。

母A　私は、あの羽曽部先生の詩集の話をいつかなさった時〝今の子どもたちに戦時中のこういう感覚がわかるかしら〟って申し上げましたら先生は〝いや、本物はどんな物でもぶつければ、

子どもはわかる本能をもってるものなんだよ〃っておっしゃいましたね。ですから、神って事をおっしゃってわかると思います。

周郷　わかる……。だけど大人のくせで、ちょっと説明するじゃない？本当に大事なものは説明がつかないんじゃない？　だから、心臓の事をいってそこからいおうと思いました。あなたの心臓はいつかとまる時がある、心臓は動いている、そうすれば人の悲しみもわかる、そして地球全体の事も感じてわかる、これはどこからきてるんだ、といおうと思ったんだけど、説明になってしまうんだ。

母A　またいわせていただきますが、この間本人の祖父がなくなって、とても生きてるって事を感じているらしいんです。

　また、かまきりの卵をお友だちからいただいて幼虫が生まれて、そういう循環をひとめぐり、この一年間で見たわけです。そうしましたら毎日〃生きてるってふしぎだね。でもぼく、わかったよ〃っていって過ごしてたんです。そしてある朝、〃ママ、でもぼくは、生きてる気持ちが、いつぼくの中に入ったか、全然わからない〃っていうんです。ですから〃それはとても大事な事だから、いつまでも忘れないようにしてね。生きてる気持ちが科学で説明できないって事は大事な事なんだから、ぼくすばらしい事いったから、ママもあなたのノートに書いとくから、あなたも覚えてなさいよ〃って親はにげてしまって、にげてしまったわけではないんですけれど……。そういう事がありまして、子どもっていうのは意外に神秘感ていうものがするどいと思いました。

周郷　あのね、子どもは、大人は説明を求めるけれど、直観的にすっと入っちゃうのね。一挙にわかるのよね。そして非常に哲学的なんです。だけど、物を食わせすぎたり、ぜいたくさしちゃうと、この能力がこわれてきちゃうんです。で、大人の方が散文的なんですよ。しかし〃なぜ？〃なんて子どもに問いつめたら、子どもは説明できないんです。

　だから、小さい子どもっていうのは、大人の理解のし方でなくて、こう一挙にわかるという、つまり意識しないでわかるという性質をもってるわけです。それが動物やなんかと共通してもってる、本能に似たようなものなんです。そして、人間の知能っていうものは、動物と違うものなんです。それがこんな乱雑な世界では、子どもから失なわれていくのです。

　そして、山へ行って日の出を見るといっても、そばにかいぞえの人がいないと、つまり見る目というものがなけ

れば環境はないと同じです。見る目があれば限りなく豊かなものです。そういうものを育てたいと思ったが、ついにやれなかった。

母A　そうですか……。なぜでしょう。

周郷　なぜでしょうって……ぼくが大学の教授ならね、ぼくが本当にいい講義をすれば、オーケストラの指揮者のように、学生はついてきます。しかしここでは、演奏者を演奏させなければならない。ある種の組織ですよ、ある意味で……。それでやれないわけですよ。

母E　でも、やれなかったって先生はおっしゃいますけれど、私どもは大変感謝している面が……。先生はやれなかったとおっしゃっていながら、やはり私どもに非常に大きなものを与えて下さったと思います。（全員　そうですの声）

周郷　だから、もし本当にそれがお母さんたちの心に残っていたとすれば、それはぼくは、非常に感謝です。完全にやっちまったって事は、おもしろくない事なの。やろうとする糸口ができてるって事が大事なんであって、やる気があればいつかは実施するもとです。

母A　ただ、園長先生ご自身が、子どもたちと接して下さる時間が、少なかった事が、…。

周郷　ここでは接したくなかったんです。だから、海やなんかでは、本当に一緒に遊びました。

まず、小さい事から

母F　私は、いつも先生のお話をうかがっていまして、母親自身常に姿勢を正す、というとすごくくたびれるように聞こえますが、そうじゃなくて、自分のまわりのうんと小さい、ささいな事でも、真面目に息子や娘に接してやれる事がたくさんあると思いました。

物を大事にするという事、先生がおっしゃった、乗物に乗ったらすわるな、という事とか。それから、買う時にはよーく物を吟味して買って、こわれたからすぐ捨てて次を買いましょう、などという態度自身、子どもに対して恥ずかしいと思うんです。ですから、いつも先生のお話をうかがうたびに、もっと反省しなきゃという気持ちになります。

うちの主人は戦前の人間ですが、自分の息子に〝いさぎいい男の子になれ〟というんです。というのは、今ここに三十人しか入れない防空壕があって、子どもが三十一人いたら、〝ぼくは外でいい〟っていえるような男の子、になってほしいというんです。

でも結局情報過多で、その中から取捨選択して、どれを息子に向けようかという場合に、小さい小さい事から始

める意外はないんです。

周郷　小さい時から始めるしかないんですよ。ぼくは、家の近所の川を、一生懸命苦労してやっときれいにしたんです。でも誰も見てません。そしてやってると、百姓の人まで〝先生、もっと金になる事したら〟なんていってね（笑い）。ぼくはでも、そういいながらその年とったおやじさんの心を感じるわけです。そういう小さい事から始めなきゃ、環境整備とか何とかいっても、自分でもよごしてるんじゃないの。小さい事でも、やれば今までと違う喜びがあるんです。

電話がかかってくるでしょ、それでぼくは今、川を掃除してるんだっていうと、ふつうの人は〝適当な健康でいいですね〟っていうんだ。（笑い）

母F　ですから、やっぱり母親っていうのは、何に対しても前向きの姿勢でいなければだめですね。でも女っていうのは、どうしても眼の先の事を見がちなので……。

周郷　それは、皮肉にいうと、日本全体が養鶏場に似ているとよくいうでしょ？　おんどりがいなくてめんどりだけだと。やっぱりおんどりがときをつくっていなきゃだめなんですよ。男っていうのはちょっとぬけた所があるからね。でも男がいなきゃ女はだめになっちゃうっていう事も事実です。だから尊敬しなさいって命令はしないけど、男と女っていうものを、神様が作ってくれたんだなあ、女だけがいばってもいけないし、男だけがいばってもいけないんだな。

母F　うちの主人の場合は、ともかくママは目先の事を見ていなさい、で、自分が、はずれそうになったら引き戻すといいます。ともかく怪獣物とかテレビのいろんなひどい物がはんらんしてると、だまってポンと、うんと真面目な本を二冊ぐらい買ってくるんです。そして〝今日は寝る前にママにこれを読んでもらいなさい〟っていうんで、はっと私が反省したりすることります。

周郷　わりあいにいいだんなさんです（笑い）。そんなだんなさんあんまり見ないね。家へ帰ってそういうといい。

簡潔

母G　今日の子ども会の劇（マッチ売りの少女）ですけれど、子どもたちにわかったかどうかと思って……。

周郷　大体、あそこに出てきた少女もありまりあわれな少女っていう感じじゃないね。

小さい子どもに見せる時は、いろいろ説明が多いとだめなの。あきちゃうんです。簡潔ないき方で、おしい所でパッとやめなきゃいけないの。これはお母さんが子どもに物をいう時もそう。

何か印象がまとまらないんです、子どもの心の中で。非常にくだけちゃった印象になる。中心に向かってすーっといって、パッと切れなきゃいけないの。

何だか安易な、エンターテインメント、もてなしっていうのはああいうんじゃだめだな。非常に簡潔で、ぶっきら棒みたいだけども、もり上がったところでパッと切れる、それでいいんです。それは日常生活においても、お母さんは口数が多いもんですからね、その調子でやったら印象がまとまりません。

母E　それで思い出したんですけれど、先生がこの夏ヨーロッパへいらっしゃいまして、一学期の終業式の日に子どもたちにはがきをよせて下さいましたね。あのはがきの文面を、うちの子どもは非常に鮮明に覚えてまして、ずーっとあの〝小さなものたちよ〟っていう所を……。そして何かの時に〝ママ、あたしたちは小さなものたちなのね〟って申しておりました。

周郷　ああそれは……。ぼくはね、ヨーロッパで歯が痛くて、したびれてやっと書いたんだけれど、ありがたいね。

母F　私は本当にびっくりいたしました。私がもし子どもに手紙を書くとしても、ああいう言葉では書けません。格調が高いというか、あれは本当に感謝しております。

周郷　それはぼく、考えもしなかった。ありがたい事です。

本当の人間との出会い

母A　今のお話でも感じられますけど、子どもって本物をかぎわける嗅覚か触覚かもっていますね。男の子ですのでいちいちは申しませんが、うちの子どもは〝あ園長先生の写真だ〟といって新聞を切り抜いておもちゃ箱の中に入れて持っているんです。ただ何か、慕っているというか…。

周郷　いや、それをぼくはいろいろな機会に感じます。

母A　子どもはやさしいやぎが好きなように（笑い）何か、そういう意味じゃなくて、本物をかぎわける力は大人以上ですので……。私は、親としてしてやれるのは、子どもがこれから長い人生で、本物をもっている方たちに多く出会えるような場を作ってやる事だけだと思うのです。

周郷　ぼくはずっと前からそういう考えでいます。学校っていう制度があって、先生がいます。しかし先生っていうのは俸給生活者なんでね。どこで本当の人間に出会うかっていう事が、一人の人間が成長していくのに一番大切な事です。先生なら誰でもいいっていうわけじゃない。学校の外でもいいんです。どこで本当の人間に出会うか

という事です。

母A　それにひと役、まあ子どもよりは長く生きているので、嗅覚は子どもの方がするどいかもしれないけれど、ちょっと助けてやりたいという気があります。そういう意味で、周郷先生がここの園長先生をなさるという事を、カトリックの方のシスターから聞きましてここへ来たわけです。ですから先生がいつも心配していらっしゃるように、お茶の水という名前でみんな集まったなどという事は、案外ひとりひとり打診してみると、ないんじゃないでしょうか。

母E　子どもだけでなく、私どもは先生のお話をうかがったり接していられたりしたこの年月というもの、月謝とかそういう事でなしに、本当にしみじみと人生を考えるっていうか、私どもこれから家庭をもちながら何か一人人の人間として生きていくためのきっかけみたいなものを、たくさん教えていただいたような気がします。

周郷　ぼくはお母さんたちもそう思うべきだと思うけど、ぼくは学生にいろいろいったりしたりするのを全部忘れちゃうの、でも向こうは覚えてます。相手の人にとって本当に役に立ったいい事っていうのは、忘れてしまう事でなければいけないの。いい事をやったと思ってるかぎりはいい事にならない。別な言葉でいえば、無意識にいい事をしなければいけないんです。これは、お母さんが子どもに対してやってる事でもそうだと思います。お母さんが意識してる部分は、子どもはおそらく覚えていないなじゃないか。たとえいい事が意識のままで実現されても、おもしろ味がないです。

ところが、今の教育っていうのは、全部意識してやってるからいけないんだと思います。効果ばっかり考えて、意識してやってれば教育やという商売人になっちゃうんです。教育ママというのは、意識の範囲内だけで子どもを自分の望みのように育てようというのであって、それじゃだめなんです。

自主性と自治能力

周郷　昨夜、一月六日に放送される座談会に連れて行かれたんですけれど、ぼくはその最後の方でちょっと言いました。

共産党が出てきたっていう事は、自民党にとって脅威なんです。司会の伊藤昇さんがいったんですが、戦後民主主義で問題になったのは、地方の自治、それから住民の自治能力なんです。これらが経済大国主義ですべて中央集権で、地方に育たなかったわけです。憲法の中で忘れられていた問題なんです。つまり、地方が自治能力、自主性をもつという事で、中央政府が方向をコン

トロールもできるし、中央と地方がつながった状態にもなります。

住民とか地方が、自治能力がなければ全部中央政府の命令になっちゃうんです。危険ですよ。そこで地方の教育委員会を公選にするという状態がおこってきたんです。今のところは教科書の選択でも何でも、全部命令通りなんです。やっぱりわれわれは、小さな事でも政府のいう事にかなっていればいいというんじゃなくて、各自が自主性と自治能力をもたなければいけないんです。公害とかゴミの処理とかを見ても同じ事です。

有吉佐和子さんが座談会でいってましたけど、あの人はマンションにいて、ゴミはできればもえるものもえない物、腐る物とか別々に紙に包んで出すんだって。すると管理人が紙じゃいけないっていうそうです。皆一緒にビニール袋に入れて持ってきて下さいっていうんだって。有吉さんにいわせると、ビニールに入れて捨てると、これは永久にそのままでいるんです。腐る物も腐らない、何万年もそのままでいます。

そういう工合に管理人の感覚も変です。中国はちゃんとやってますよ。ゴミも資源だから、腐る物はちゃんと腐らせて肥料にして大地に返せばいいんです。再生できるものは再生すればいいんです。そういう事は政府がやってくれるからってどんどん捨ててたらだめなんです。政府の方から頼まなきゃならん問題かもしれないんです。

教育の問題なんていうのは、政府がいってるからいいだろう、政府にかなってるからいいだろう、そんな事ないですよ。地方が、あるいはお母さんたちとか、近隣の人同志とかが自治能力と自主性をもってなきゃならないんです。政府なんていうのはインドの人がいったように、からバケツです。人民はわいてる井戸水のようなもので、井戸水がわいてこなければ政府はからバケツなんです。ガンジーの弟子がいった言葉です。今の政府、からバケツといった感じでしょ？　からバケツのやれる範囲は、お金の問題だけです。精神的な問題にならない。やっぱりぼくらが自治能力をもって、責任を問うという態度、そして大切な問題は一生懸命に考えて新しい道を見つけ、汚染から脱出する、心がやさしくなるというふうにお互いが行動しなければならないと思います。

母G　私の家はここから二十分ぐらいなんですが、その道を歩いてくるだけで非常にのどがいたくなりました、公害問題を身にしみて感じました。

周郷　ちょっと聞くけど、その前は家の中にずっといたの？

母G　はい。（笑い）

周郷　家の中にいた方がのどはいた

くならないんだなあ。

母G　でも、車の通りがものすごくはげしいんです。ですからそれこそふきつけに排気ガスをかぶるようになります。子どもの方もたんがつまるようになって、これはひどいと思いまして、私だけでも、となるべく車に乗らないようにしましたけれど……。少しでもほんの小さい事でも、皆が気をつけていきたいと思いました。

周郷　公害っていうのも、これからどんどんひどくなりますよね。でも今聞いてると、家の中にいるのが一番安全だっていう事かな(笑い)。そんならもう隣り近所ともつきあわないで、家の中でテレビでも見ていたらいいのかな(笑い)。

ふたたび、グローリー

母A　それは皮肉ですね。また話が戻るようですが、さっき先生は、息の長い見方をしてグローリーっていう、そういうものを、今日の子どもの中にうえつけていくとおっしゃいました。結局具体的な事でひとつひとつうえつける事はできないわけですから、なにを子どもにとってグローリーにするかという事が、毎日の課題じゃないかと思います。今の公害の事でも、子どもと一緒に、ひとつゴミを拾う事もそれにつながるんじゃないかと思いますが、もうちょっと範囲をひろげて、何を子どもの生きがいに、生きがいじゃないですね……。

周郷　生きがいっていうのは子ども自身が見つけていくものです。

母A　そうですね。さっきおっしゃったように、自然に対してもかいぞえがいるように、親が何か……。

周郷　だけど、ほっておいた方がいいという事もいえます。あまり説明過剰で印象がうすくなるならば、むしろほっておいた方がいいんです。というような意味で、親たちがグローリーなものを求めていればいいともいえます。

ちょっと気がついた事だけれど、子どもは自分で育っているわけで、非常に時間と辛抱強さがいります。これは今の日本人としては、キリスト教のエッセンスみたいなものを学ばなければいけないと思います。辛抱強くなければいけないし、待つという心を、焦って効果を求めるのではないという事は、キリスト教からしか学べないのではないかと思います。効果があるかないかわからないけれど、〝求めよ、さらば与えられん〟という事は本当です。あるいはそれは死んだあとに実現されるかもしれません。

死んだあとに実現されるというと、ぼくは東山魁夷さんの事を思い出します。お母さんが死ぬまで不幸で死んでいったあと、東山さんの絵はよくなっ

たんです。親孝行の彼であってそうなんです。ついに親孝行ができないで、お母さんも兄弟も全部死んじゃうんです。そのあとで、お母さんはもうこの世にいないんだけれど、息子は彼独得の絵をなしとげました。

竹馬とお手玉

母H　今日は子どもたちもたくさんプレゼントをいただきましたね。家へ帰ってからもプレゼントをもらうと思いますけれども、何か、本当に心が豊かになるような、精神的なものを上げたいなとつくづく思いました。

周郷　そう思ってるんだけどね…。もし、ぼくらの子ども時代なら、物はないんだ、だからプレゼントもうれしいけれど、今は物が多すぎて物を上げても大して効果がないですね。でも、上げなければかあいそうだと思って、そこでまあいろいろ工夫して、でも今年はここまできたでしょう？　外で買った物じゃない、ここで作って、そして多少買ったにしても個性的で…。クリスマスがともかくここまできた事はうれしいと思います。

母B　お母さま方みんな協力して下さってね。うちのクラスは男も女も手製のものにしました。竹馬を作ろう、といいましたら意外と反対の方が少なかったんで、びっくりしちゃったんです。

周郷　あの竹馬、作ったの？

母B　ええ、作ったんです。竹を切って。

周郷　そうですか、そりゃ、ぼくよく見たかったな。

母B　女の子は、お手玉を作ったんです。矩形の布を四枚合わせて……。

周郷　あのね、お手玉とか何とかっていう、ヨーロッパにもそれにかわるものがあるけれどもね。幼児教育の時期に数学やなんか教えるのに、ああいうものをもとにして教えるんですよ。

昨夜の座談会で遠山啓さんがいってました。今の子どもはジャンケンができなくなったんじゃないかって。これだってやっぱりおもしろいものですよ。この先にいろんな物がひろがっていく基本的な能力をもってます。ジャンケンだってお手玉だって、何でもないようにあったんだな。しかしこれで感覚を養ったり、物の量をはかったり、一種の技倆ね、こう女の子がひどく優美にお手玉を処理するね、そういう事が大事なんです。そういう事をぬきにして教育という変な物を作っちゃったのは困った事です。

母D　つくづく思うんですけれど、私たち戦争に負けて、まず経済的に立ち直ろうという事が第一にされて、心を忘れて、おもちゃ一つにしても、便利な、子どもの気を引くようなものが

多くて、子ども自身が自分の手を使うとか、考えるおもちゃがないのはどうかと思います。

選ぶ能力

母F　たくさんあるっていう事は、選べる可能性がたくさんあるっていう事じゃないかと思いますが……。

周郷　だからぼくは、子どもを相手にしてもうけようというやつがいろいろな物を作るでしょ。しかし、ある物を拒否するという、そういう能力を発揮してもらいたいと思います。

それはテレビについても実行してもらいたいの、あれだけ日本のテレビはチャンネルがいっぱいあるんですから、選択能力の修行の場所としてあれを使ってほしいんです。そうすれば、人生いろいろ誘惑があったって、どの道を選ぶかという時に、グローリアスなデシジョンをやれる人間になれると思います。

母B　それは子どもにもあると思います。うちの上の子なんですけれど、テレビを見てまして、レインボウマンていうんですか〝あれ、すごいから見ないよ〟ってこのごろ消しちゃうんです。ほかの怪獣物は見るんですけれど、レインボウマンはひどいっていうんです。見てて主役がかわいそうだっていうんです。

周郷　どのくらいひどいか、お父さんもお母さんも一緒に見るといいんです。

母F　うちの主人は、新聞を見てて〝今日は何がある?〟って聞きますと、〝今日はあれないよ、きっと特別放送があるんだろ〟って切っちゃいます。そしてテレビを消さないとご飯にしませんとかしちゃうんです。ですから五歳でも、最近選択ができるようになって来ました。

母B　見てて、結局自分で残ぎゃくだからいやだっていうようになればいいですね。

母I　本能的にそう思っているらしいですね。

周郷　本能をもってるはずなんですよ。その感覚をぼけさせるのはまわりです。

母A　先生〝デパートは君たちの必要な物は何一つ売っていないよ〟っておっしゃいましたね。私どもはデパートに行くたびに親子して、負けるもんか、負けるもんかって思います。本当にあれは、商業作戦にひっかかるかひっかからないかの瀬戸際ですから…。

周郷　そうですよ。またデパートは最近ひどくなりましたね。

母A　本当に…。〝ぼくに必要な物、何もないのよ、先生もおっしゃったでしょ〟っていいますと〝うん、ないよ〟っていいながら…。

周郷　その中でね。どれか一つ選ぶっていうんならいいですよ。

母A　はい、選びます。

周郷　その方がはるかに価値があるんだよ。ぼくにとってデパートなんていうのは、さるまたを買う所でしかない。（笑い）

母F　子どもは本物を選ぶとおっしゃいましたが、おもちゃにしても、子どもは本物を選びますね。

周郷　だからそういうふうに選ぶ能力ね。選ぶっていうのはいろいろくらべるんだからまさに学者のやってる事ですよ。そしてどれとどれって見てね。たくさんだから選ぶのも大変です、つい誘惑されそうになる、そして反省もする、これは非常にいい事じゃないですか。

母F　うちはおもちゃ過剰気味なんですけど、結局うちの場合は直すんです　それと一人っ子なもんですからふえちゃうんです。でもやっぱり彼が選ぶのは、色がついてない、かなり大きな積木とか、ブロックしか選ばないですね。最初は毒々しい物にとびついても最終的に返るところはいいおもちゃに返っていくというふうに、最近変わってきたような気がします。

周郷　それが事実なら、デパートのおもちゃ売場にチビをつれてって遊ばせて、こりゃだめだって審判者にするのもいいね。

母G　あの、くだらないものは、そこで遊んでなさいって、そうすればすぐさめると思うんですけれど。

母K　私も実は、デパートへ行きますと、遊ぶ場所がありますと、そこで遊ばせるんです、そして〝どう？　お家へ持っていっても遊びたいおもちゃあった？〟っていいますと、大抵〝いらない〟っていいます。ですから三十分ぐらいねばってそこで遊ばせるんです。

連帯感からボランティアへ

母A　もう週刊誌もいやだし、テレビもいやだし、デパートもいや、何かこのごろ年をとったせいかいやな事がなくなったんですけれど、もっといい物をうき上がらせるような何か…。

母E　私、このごろつくづく思うんですけれど、何か一人一人が考えていてもどうにもならないという時に、女同志のいい意味での連帯感ていうものがほしいと思います。

周郷　一人一人ではいっても仕方がない。

母E　そうなんです。もしそうであれば、この間も三越で何周年かに何億っていうお金を使ったって新聞に出ましたね。あの時に友だちが、社長に直訴して三越の物はもう買わないと、その内何千万かを何かに下さいっていい

ましょうっていったんですけれど、いかにせん二人ではどうにもならなかったんです。（笑い）

周郷　これから、そういう行動ね、よく考えてやらなきゃいけないけど、お母さんがおこすって事は必要ですね。この教科書は悪い教科書だ、いくら文部省の検定を通っていても事実を見て下さい、これでは子どもが悪くなります、とそういう事をやっていく必要があります。

母E　でもなかなか生まれないですね。

周郷　それがね、グローリアスデシジョンていうのは、勇気をもたなきゃやれないんです。よく考えた上で。田中さんみたいになっちゃった、勇気と決断なんて、あれこっちへもらえばいいんだ。

母B　ともかく欲求不満の人って多いんじゃないかしらね。

周郷　そうです。男の人は疲れはてるからそうでもないけれど、女の人はひまがあるとノイローゼになっちゃうわけです。だから、ボランティアみたいな事をやるとか、外国語、中国語を一生懸命勉強するとか、そういう事をやらなきゃだめですよ。

体でも神経でも頭脳でも、使わなければどんどん退化します。退化している状態の中で何か不健康な状態になるから、だんなさんに不満をもったり、いろいろと不満をもってくるわけです。使えば健康になるんですよ。

母C　ボランティアのようなものがふえていって、そうすると社会とのつながりができますね。それが子どもに影響していいんじゃないかと思います。

周郷　ボランティアを、あの人はやってるけど、今本当に病院なんかでは人手が足りなくて医者もいいかげんなんですよ。卒業生で、今、病歴の研究をやってる人にききましたがそうだそうです。そして彼女はアメリカへ行って病歴の勉強をしたいっていうんで、千谷七郎さんに紹介しました。千谷さんはぼくの親友ですから。精神科の医者は心理学者よりいろいろおもしろいんです。千谷さんの話は哲学的で、ぼくみたいに夢みたいなところもあってね、いいです。

やっぱり病院なんかへ、報酬なしで働きに行くと、いい友だちができます。いい友だちと出会うんです。やっぱり本当に、しんから友だちになるっていう事は、日本ではチャンスが少ないんです。

ま、のどがいたくならないように毎日テレビを見て家にいるっていうのも一つの健康かもしれないけれど、それじゃ一生家の中にもぐっていてそのまま棺おけに入って行ってしまいます。生まれてきたっていう意味はそういう意味じゃないはずです。

自転車で走る道

母F　それと似た例なんですけど、国道を走ってますと、子どもが黄色いつばのあるピケの帽子をかぶっているのが普通なんですけど、山梨の方を通りましたらそれがヘルメットなんです。これはやっぱり大人の責任かなと思ってかあいそうになりました。

周郷　よくいうけれど、子どもも大人も自転車だけが通る道がずーっとあったらね。車ばっかりつっ走って、だめですね。おもしろいじゃないか、お母さんも自転車に乗ってね。

母L　最初私は、ここへ自転車で通ってたんです。でも皆に笑われてやめちゃいました。それにこわいんですね。通りが。

周郷　この通りはおっかないですよ。でも見てるとね、子どもはなかなか頭がよくて、勇敢なのかな。大きなトラックがいっぱい通っているとこを、ちょっととまるとその間を、自転車でさーっと行っちゃうの、危険だと思うけれど、何て頭のいい子だろうって感心しちゃいました。

ニューヨークなんかでも、ほとんど冒険ができないんだって、火事とか、殺人とか停電とかっていう事が突然訪れてくる私的な体験で、あとは全部機械がやってくれるんです。もう少し目がさめるような、知的な経験がないんだろうか。自転車でずーっと向こうまで行けて、そこにきれいな泉が湧いてたりね。

母G　私は朝歩いて登園しますけれど、いろんな道を歩いてきますと、よそのお宅の寒椿が咲いていたり、いろいろ楽しみながらのんびりとまいります。子どももかえってその方が楽しいらしくこの間あまり急に寒くなりましたので、寒い時だけ車で行きましょうかって申しましたら、園長先生ががんばりのある子でなくちゃいけないっておっしゃったっていわれました。

周郷　子どもの方がまともですよ。あのね、この間座談会をやった時ね。花がおいてあるんです。それが、非常によくできてるんで皆がホンコンフラワーだと思ってさわって見ました。本当は本物なの。それが一つの葉の先が枯れてるの、枯れてるからホンコンフラワーじゃないと思ったんです。

ホンコンフラワーってかけてる所がないの、完全なの。だから人間も欠点があるっていうのが人間でいる誇りなんですがね。でもその内に、枯れた所のあるホンコンフラワーができてきたりしてさ…。（笑い）

母B　では　いつまでお話してもつきませんが、大変長いお時間をとりまして、ありがとうございました。

（十一月十九日　お茶の水幼稚園）

私の失敗

大崎　利恵子

はじめて子どもの前に立ってから、もう一年経ったとは、とても信じられない思いですが、保育者としては、まだたった一年の新米の私です。失敗を数えていたら増刊号ができてしまうのではないでしょうか。

あわてんぼうの私は、早とちりをしてしまい、てっきり、けんかをしていて下じきになっている子が、上の子にやっけられているのだとばかり思い込んで「さあ、あなたたち、お口で話してちょうだい」、なんていったとたんに「ばかな先生、ぼくはウルトラマンなんだよ」と下じきになっていた子からはね返ってきて、内心びっくり！　でも平然と「あらそうだったの。それじゃ、本当にやっつけないようにやってね」などとすましてその場を去ってみたり、みんなに配ろうとして持っている本を落として、子どもに笑われたり、子どもの名前を大きな声でまちがえて呼んだり、本当に細かい事はいくらでもありますけれど、中でも忘れられない出来事が、いくつかありました。

ある日、身体があまり強くなく、休みがちのI男が宿かりを持って来た。「なになに？」とみんなが寄って来る。ふだん友だちに囲まれるような事の少ない彼は、「宿かりだよ」とぽつんと答える。かごの中から机の上に出してあげると、チョンチョンと指で貝がらをつっついてみる。I男は生き物が好きでよく接しているので平気でつかんでみせる。それを見て、みんなもI男に勇気づけられてか、つかみはじめた。

I男はすっかり中心になって「だめだよ」とか、「そっちのをやれよ」、などと指示をしている。それに慣れると、数人の男の子たちが、今度は手のひらにのせて遊びはじめた。「ほら

見て、何ともないんだよ。平気だよ」I男は生き生きと訴えてくる。「まあ、くすぐったくないの」と内心、先生もやって、と言われたらどう言ってのがれようかと思いつつも言葉を返していた。「おしまいにする時にはしまってあげてね」と言い残して他の子の所には私は移った。

ところが、しばらくすると「先生いたいよう」とI男が悲鳴をあげながらとんできたのだった。「どうしたの」と言いながらI男の手のひらをみると、なんと、宿かりがしがみついている。生き物に対して何となくこわさをもつ私のその時の驚きと言ったら何とも説明がつかない。その手のひらにしがみついている宿かりを見つめて「どうしよう、どうしよう」と心の中でくり返す。I男は目に涙をうかべながら「いたいよ」と私を見つめる。ひっぱった所でとれるはずはないし、かみついている（？）のだから、ひっぱればかえっていたい。まだ経験の浅い私は手だてを知らないのでどうしようもない、何事につけてもまず相談しにいく先輩の先生（幸いにもろうかをへだてた前のクラスである）の所にとんでいって「どうしよう」と聞く。その時のI男の気持ちを今思えばなんとも心細かっただろうと思い、申しわけない気持ちになる。先生に言えばよいと思っていたにちがいないのだから……。

「水をかけたら」というアドバイスを受けて、じゃ口から水をかけてみるがびくともしない。その時の私にもっと落ちつきがありさえすれば、バケツの水につけて時間をかけたのだろうに、そんな余裕はまったく皆無の状態である。水を少しかけてもだめとなって、またまたどうしようもなく、I男の手をひくと、職員室の主任先生の所にひっぱっていくことにした。その興奮を今思えば、本当に笑い話だけれども、その時は真剣だった。「もうすぐとれるからね、もうすぐよ」と言いながら、途中でI男のくつが片方ぬげてしまうほどのいきおいで、彼をぐんぐんとひっぱっていった。I男の方が落ちついていたのか「先生、くつが片方ぬげた」と訴える余裕をもっていた。にもかかわらず、信じられないことだけれど、私は「あとでひろえばいいわよ」とひっぱったのだった。

職員室の戸をガラッとあけると「先生！」とどなる私、びっくりした表情の主任先生、「I君の手に宿かりが…」と言うか言わぬかのうちに、「そんな大きな声を出さないの！」という声がはね返って来た。「はっとして我にかえる」とよく言うが、まさにそのとおりで、私はそれを聞いたとたんに自分をとりもどした。主任先生は落ちついてI男の手をとると「さあ、もう大丈夫よ」とまず彼を落ちつけ、さらに泣くのをやめるように話をしている。そのようすをみて、やっと冷静さをとり戻しはじめた私は「もう大丈夫ね」と、ひと言いうのがやっとだった。

保健室でカンフルをざあざあかけると、あんなにしっかりとしがみついていた宿かりが落ちて、死んだ。I男の手のひらには、小さなあとがくっきりとついていた。

保育をはじめて、たった一ヵ月しか経っていなかった私にとって、はじめて出合った非常時であった事は疑うまでもない。頭で思っている事と、実際の場面に当たって動く事が、いかに一致していないかという事を自ら味わった出来事だった。

それにしても、大きなけがでなくてよかったと思うと同時に、何か起きた時、適切な処置ができないのでは、一人前ではないということをしみじみと感じ、こうした経験を積み重ねていくことがまず才一歩だなと思われた。この次、何かあったら、まず自分が落ちつくことにしようと自分に言いきかせた。ついでのことに、この宿かりの運命について述べておくと、すっかりびっくりぎょうてんしてしまっていた私に、水をもらいそこねて、あわれ、翌日には全滅してしまっていた。I男には、本当に申しわけない事になってしまったが、二人でおはかを作りうめてやった。

まず自分が落ちついて、適切な処置をという決意をためされる才二の事件は、遠足の途中に起きてしまい、なんと、その時も落第してしまったのである。

よく晴れた明治神宮の宝物殿前、つきそいのお母さんたちとお昼を食べて自由に遊んで、さあ、もう帰りましょうという事で、クラスの子たちを集めて歩き出した。ご存じの方も多いと思うけれど、あそこの池の端は細いみぞになって流れている。そこをみんなでとびこえていこうという事になって、ぽん、ぽんとまずは男の子がほとんど、飛びこえて来た。あと数人の女子だけという時に、みぞを前に立ってみていたM子があっという間に、そのみぞに落ちてしまった。どうやら、となりの女の子がふらっとしてM子の背中につかまろうとしたらしく、用意していなかったM子が落ちるはめになってしまったらしい。

細い小さなみぞだから、落ちても、くつとくつ下だけで済むのだが、不運なことに、M子はその中でころんでみぞにそって横になってしまった。つまりは右半身がずぶぬれ、びっくりしてひきあげる私、頭から落ちる水しずくをハンカチでふきながら「かわいそうに、もう大丈夫よ」とくり返しながら、私は内心「おちつかなくちゃ」と、まず思った。しかし、本人は落ちついているつもりでも、その実、ぬれた顔をふくばかりで、ぬれた服をさっさとぬがすことはちっともしていなかったのである。そしてその時またまた主任先生に助けられ、「早くぬがしちゃいなさい」という声、はっとして、ランドセルをおろし、やっとぬれた上着をぬがした。そして、まだぐずぐずしている

と「もうまかせて、あなたは自分のクラスの子を連れていきなさい」と言われ、みんなは、とみると、いたずらぼうずたちはさっさと自分たちであちこちに出張してしまっている。大きな声で呼び集め、才一の集合地点まで行く。ところが、しっかりしているつもりは自分だけで、結局私は動転していたらしく、なんと一人おきざりにしていた。あとから来る先生が連れてきてくれた時には、その肩を抱いてしみじみとながめてしまった。そのことで、自分の動転に気づかされたためか、次の集合地点に行くまでの調子のおかしかったこと、まさに気もそぞろだったのかもしれない。子どもたちは敏感なもので、ただでもさわいでいる子がいる所に、帰り道だし、うかれて来ているし、もう、ガヤガヤワイワイ、あっちへいったりこっちへいったり、友だちにぶらさがったり、まったく私の気持ちもしらないで！

結局、一度とまってみんなに話をする事で自分も落ちつけて、今度はさっさと歩き出せば調子よく、無事に地下鉄までたどりついた。

いろいろな事を経験して、子どもたちが成長していくように、保育者もまたしかりであり、何度か経験していくうちに、自然とどうすればよいか判断できるようになって、あわてなくても済むようになるのではないかと、今は、今後の自分にがんばらなくてはと、言いきかせるばかりである。毎日の保育には、本当に何か起きるか、まったく予想もつかない事がひそんでいる。宿かりにかみつかれたとか、小さなみぞに落ちてぬれた等というささいな出来事しか起きていないから、こうして笑い話ですまされているが、こんな事ですら、これだけ動転してしまう私だから……と考えると、ぞっとしてしまう。毎日の生活におこたりなく注意をはらって、ある意味ではけがをおそれて禁止が多すぎるぐらいに慎重派にならざるを得ない私である。そのうち、何があってもどんとこいという気持ちをもって、ダイナミックな活動を展開できるようになれるかもしれない。むろん、その時だって、けがをないように綿密な配慮が大切である事は変りないが……。

さて、数々の失敗の中にも、その失敗が偶然にもすばらしい結果を生み出してくれた出来事があった事も、忘れられない事の一つである。

わがクラスには、耳が悪かったために（この事もあとでわかった事なのだが）ことばがはっきりしなかったり、集団に入れなかったりで、外見的には、自閉的に見えていたK男といえ子がいる。おべんとうも、進まない時にはひどくおそく、その日もまるで食べないで遊んでいた。私が担当してからも三度目で、降園時間が来てしまい、しかたがなく、彼だけ残す事にした。

他の子を送り出すのに、彼を職員室に連れていくべきであったのだが、その前までに一人で平気だった事もあって「先生はすぐもどって来るから、それまでに食べちゃっていてよ」とほんの数分のつもりで、おいて出てしまった。何と冷たい事をしたものだと思うけれど、それまでの彼はそんな事、まるで平気だったので、本当に、ついうっかりしてしまったのだと思う。

玄関に出て、他の先生に事情を話して頼んでもどろうとした時、お母さんの一人が他の先生に「二階の窓から子どもが呼んでいる」と教えてくれていた。私はその言葉をうしろで聞きながら、部屋に走りもどっていた。そして、部屋についてみると、何と彼は、二段になっている下の窓わくに足をかけ、その上の窓から上半身、完全にのりだしているではないか。「K君！」と叫ぶと、とにかくひきずりおろした。そして、また驚かされた。彼は、わあわあ泣きながら私を呼んでいたのである。何もいわずに彼を抱くと、彼の涙はすぐとまった。

「先生のことを呼んでいたの？　どうしたの？」と聞くと「目がいたかったけど、もうなおっちゃった」とまわらない口で話すK男、「そう」と言ったきり何もいえない。彼がすっかり落ちついたので「もうおべんとうたべちゃった？」と聞くと、彼はさっさと食べだした。すぐにたいらげてしまって帰る仕たくをする。したくが終わってから、目の事は口実だと思ったけれど一応たしかめ「先生の事を呼びたかったのはわかったけど、窓にのって呼ぶのだけはもうしたらいやよ」と話だけはした。しかし、話をしながらも、一人残された彼の気持ちを思うと申しわけがなくて涙が出そうで困ってしまった。私が悪かったなという気持ちでいっぱいだった。外面的には何の変化もなかった彼だが、窓からのり出して泣き叫ばせるだけの何ものかがK男の心の中で芽ばえていた。とにかく、その時私が抱きとめた事で、私と彼とのきずなができた。感情を出す事の少なかった彼と私がはじめて心でぶっつかる事ができた瞬間であった。すべてがよい方向で結果が出たからよかったけれども、もしあの時…と考えると足がすくむ思いが今でもする。その後、K男は問題は多いけれど、甘えるようになり、さまざまな面で変化してきている。

毎日毎日、あの子がこうした、この子があんな事を言ったと、ささいな事に一喜一憂して自分の保育を反省したり、学んだり、失敗も成功も、何もかもが私を一人前の保育者に育ててくれる大切な材料であることを今、つくづくと感じています。やっと一年！　まだまだ、これからが本当の勉強なのかもしれません。この終りのない道をどこまで歩み続けられるか、がんばりたいと思っております。

（文京区立汐見幼稚園）

幼児の観察研究

――実現しようとする意志を育てること(1)――

津守　真

保育研究の重要な方法としての観察法について述べてきた。観察法は、そこで起こっていることをとらえる方法であり、保育担当者は、そこで観察したことをもとにして次の保育を考え、第三者の観察者はそれによって子どもの理解を深め、保育を考える手がかりとする。

今回は、具体的な現象をとり上げて、観察法について考察することにする。いずれも、子どもが何かを実現しようとする意志と関連する場面であるが、第一には、発達経験の観察、第二には、イメージの観察、第三には保育者自身の観察と、異なった観察法を用いている。観察は、観察した保育の内容と密接な関係をもっているので、両方の考察を同時にすすめる。

一、「安心すること」から「すてきにすること」へ――実現の意志の出現過程

1　発達経験の観察記録

まず最初に、ここで考察する観察記録を掲げる。

三人の子どものドーフ粘土の場面の発達経験の観察

・安心してたのむ
・安心して水をいじる
・評価されないで能力に合ったことを思うようにやる（ドーフにさわること）
・おちついて、いろいろつくることをたのしんでいる
・自分の思うようなものができて、それが承認される
・「すてーきにするの」といって、釦をドーフ粘土に包みこむ
・自分がすてきにしようと思っていたものの一部をとられると、とてもおこる
・妹のPは、すてきにつくっている姉をみると、それがとてもうらやましくなって、手を出す。自分で作ることはまだできない

この記録は、簡単なメモのような記録であるが、これが作ら

れた経過と考え方について最初に述べておきたい。

六歳、五歳、三歳の子どもたちが、ある日、ドーフ粘土を始めたとき、私は、子どもたちがそこで何を経験しているかを、できるだけそのままに感じとろうとする構えをもってはいった。その構えは、一方には、その場面に浸りきる面（そこにはおのずからにうける感動がある）と、他方に、子どもたちの中に起こっていることを、はっきりととらえようとする意識的な面とをもっている。そこで感じとって意識化したことが記録に残される。

このドーフ粘土の場面において、私が感じとったものがいくつかある。それは簡単に言葉にしてしまえない、微妙な内容をもつものであるが、記録に残すときには、その場で考えられる文字で記しておくことになる。このような記録のもとになっている「感じたもの」（正確にいうならば「感じさせられたもの」であり、これをイメージといってもよい）は、文字記録になっていなくとも、その観察をした本人には、いつまでも残っていて、実際保育の面からいうならば、次に子どもに接するときの基盤となる。また、こうして「感じたもの」が集積されて、人の経験の核を形成する。子どもの側に視点を移しても同様である。子どもは、周囲の世界にふれて、感じるものがある。子どもが大人（保育者）にふれるとき、われわれが子どもにふれるときに感じるものがあるのと同様に、感じるものがある。それが子どもの中に集積されて、子どもの経験の核を形成する。

子どもと大人が同じ場面にいて、大人が感じるものがあるとき、それが核となって、大人の経験がつくられている。その同じ場面で、子どもにも感じるものがあるとき、そこに子どもの経験がつくられる。その両者は全く同じものとはいえない。しかし、そこでは、人は自分の意志によって感じるのではなく、他にふれて感じさせられるのである。大人は、子どもの感じているものと同型のものにふれているといってよいであろう。子どもの感じ方は多様であり、大人はそのある面にふれているにすぎないことは、常に心得ていなければならぬ。しかし、大人の恣意が減少する度合に應じて、子どもと同型のものにふれることができるといってよい。観察は、大人が子どもにふれたところでもつ大人自身の経験であるが、子どもの世界が全面的に自らの中にはいり込んでくる中でつくられる経験である。

2　安心すること

(1)　「安心してたのむ」「安心して水をいじる」

安心してたのむというのは、具体的行動としては、もっと粘土をちょうだい、水をいれてなど、言語を伴う行動である。私はそれに応じながら見ているのだが、私はそれを、子どもが「安心して」たのんでいると見ている。子どもは、それをことわら

れないと思っているかのようであり、私も子どもがたのんできたことに応じるつもりでいる。私は、ここで安心して大人に向かえる子どもの心の状態を、この一連の活動の中で重要なものとみている。

子どもが安心してたのむということは、大人の行動の背後に、安心して相談相手になってくれる人を見いだしていることである。大人との瞬間、瞬間の交渉の中に、自分がひろがっていくことの不安をもちながら、活動をひろげていくことのできる安心感が、ここでは優勢である。

私についていうと、私は子どもを安心して見ている。子どもが思うように、粘土や水をこねている中に、子どもの自身の世界が育っていることを少しも疑わないで見ている。子どもが安心して大人を見るということが、大人の側から確認されるといえよう。大人の側と、子どもの側と、相互には微妙に対応するものがある。

安心して水をいじるということも、これと同様に見ることができよう。子どもは水をいじっているだけでなく、「安心して」いじっているのである。それは物との間の交渉であり、その全体は大人との関係に支えられている。安心して水との間の交渉にはいるとき、その間に生み出される子どものイメージは、予測をゆるさず、変化して動く。その性質については、この記録から得られるものは少ない。別の観察をまたねばならぬ。（次項の水と砂と器をめぐるイメージの観察参照）傍にいる保育者にもそのイメージはどのようなものであるか、わからぬことが多い。しかし、そこに自由に動くイメージがあることはたしかである。また、もしも、そこで大人に余裕があれば、大人自身のイメージをもつことができる。

「評価されないで、能力に合ったことを思うようにやる」という記録の表現は、より一層おとなの側に即している。「安心して」というのは評価しないこと、あるいは、子どもの状態に叶った評価である。「評価」や「能力」という語にとらわれて観察すると、このような記録の表現になるが、ここで起こっていることの本質に迫ることにはならない。

このドーフ粘土の場面で、子どもが安心していられるということが、「すてーきにするの」という意志の出現の地盤になっている。いまそのことに進む前に、安心して何かをするという状態について明らかにしておかねばならない、というのは、「安心して」という日本語は、他国語に翻訳することが困難な語であって、そのもとにある経験は何であるかということがもう少し明らかになることが、問題の進展に必要と思われる。

(2) 安心して何かをすることについて

安心して何かをすることができる状態は、子どもがそこから何かを始め、何かを生み出すのに重要なものであると私は思っているしまた、それに該当する事例をいくつも示すことができる。ところが「安心する」という語は印欧語に対応する語を見出すことがむずかしい。英語でこれに対応する語をいくつか並べてみると、to feel easy, to feel at home, to feel reassureb, to be confi nt, without anxi ty, wtih trust, などがあり、文脈により異なった語が用いられている。一つには、ease, rest のように、緊張のゆるんだ状態を示す語がある。これをこの事例の安心体験に対応させてみると、後者の場合には、他人との間では緊張のない状態であるが、物や自分との間には、緊張関係がある。もう一つは confient, conscience にみるように、自分自身に対する信頼をいう場合がある。この事例の安心の場合には、自分との関係よりも、他人との関係に重点がある。その点では、be trusted, be assured が安心に近い。それは日本語の信頼をうけて、確信させられてに対応し、他人との関係が強く反映する。

安心して何かをするという日本語であらわされる経験は、最初はしてよいかどうかわからない不安があり、大人との間でそれが解消し、物に対する自分の探索がゆるされ、その中に自分の意志が出現する過程といえよう。その特長として、その状態が得られるか否かは、他人にかかる面が大きいことがあげられる。

英語の語にこれに対応するものがないということは、英語国民にはその経験は明瞭な輪郭をなしていないといってよいであろう。少なくともはっきりと意識化されるに至っていない。西欧の人間関係においては個人が自分の空間と時間をもつことが前提となり、したがって物に対する自分の探索が可能にされているのに対して、日本では、子どもが自分で探索することのできる状況を、大人が保証してやらないとできないともいえよう。

3 「すてきにすること」

Aは、落着いていろいろ作ることをたのしんでいるうちに、自分の思うようなものができる。作っているものと、未来に作ろうとするものとの間に距離ができはじめる。Aは「すてーきにするの」といって、釦をドーフに包みこむ。ながめ、自分で鑑賞し、またながめて、直したり並べたりする。

「すてーきにするの」という言葉であらわされたことは、子どもの側に、何ものかを実現しようとする気持ちと意志があらわれたことを示す。実現しようとする輪郭が茫漠としているときには、方向（気持ち）だけがあり、輪郭が明瞭になると意志となる。

意志の出現の過程と個性

「すてーきにするの」という意志が出現するのには、今まで述べてきたような前段階が必要である。すなわち、安心して素材ととりくみ、探索することが前にあって、そこから出る。そこには、子どもが思うように水やドーフをいじり、ためし、作る行為の空間があり、また、自分の速度で進む時間がある。このような子どもの動き――それは物理的な動きでもあり、精神の動きでもある――には、「感じること」が伴っている。水やドーフにふれて、Aはいろいろの感じの変化、すなわちイメージの動きを経験する。それが具体的にどのような性質のものであるのか、外から見たのではわからない。形となってあらわれるものから推測していくことはできるが、この記録ではごく限られた資料しかなく、それを明らかにするのには別の資料にまたねばならぬ。

安心して水やドーフをいじることは、イメージの動きを経験することである。大人からいうならば、ちらかす空間と、せかさないでゆとりのある時間を与えることといい直すこともできる。安心してたのむ――安心して水をいじる――思うようにやる――落着いて作ることをたのしむ……ということは、こうして、子どもとして十分にイメージをもつことができるということである。その後に、「すてーきにするの」ということがあらわれる。

感じること、すなわちイメージは、その人が感じるのであるから、個人にゆだねられたことである。イメージの内容が個性的であるように、そこから生じる意志は、その性質と、個性的である。この事例のみでなく、同様の例がいくつもあるが、それらを通して見ると、Aがすてきと思い、実現したいと思う内容には一貫性がある。その個性はAのものであるから、どのような環境でもある程度あらわれたであろうが、また、Aが安心して何かをすることのできる保育環境の中で養われたともいうことができる。そのような実現の意志を養うことは、人間として大切なことであり、教育の重要な課題である。

素材にふれて、それを探索しながら、自分の感じ方やイメージをもつことから、個性的な意志が生まれることを述べた。そのような経験をすることにより、子どもは、その経験の前と後とでは、異なった自分となっている。それは、自分の中に生まれるイメージを経験しつつ、自分らしい何ものかを実現する経験であり、そこに経験としての発達がある。それが発達経験であり、それは観察によって大人も経験することのできるものである。

（つづく）

みどり会主催　第三回夏季研修会のお知らせ

みたび、「保育のこころを求めて」の夏季研修会を計画いたしました。皆さまのご参加をお待ちしております。

期日　昭和四十八年八月二十日（月）―二十二日（水）　二泊三日

場所　栃木県鬼怒川温泉　水明館（全館貸切の予定）

参加人員　二五〇名

講師　周郷博先生　津守真先生　本田和子先生　小林つや江先生ほか交渉中

申し込み　六月一日―二十日の消印まで有効ですが、満員になり次第メ切らせていただきます。

費用　参加費　一、五〇〇円
宿泊費その他　六、〇〇〇円
計　七、五〇〇円

幼児の教育　第七十二巻　第四号

四月号　定価一二〇円

昭和四十八年三月二十五日印刷
昭和四十八年四月一日発行

112東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行者　津守真

112東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一一
印刷所　凸版印刷株式会社

101東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

なんでも創ろう！ ぼくらの砂場！

キンダートンカ

★ダイナミックシリーズ

セット定価 16,300円

ダンプトラック	4,800円
ブルドーザー	3,200円
シャベルドーザー	4,800円
セメントミキサー	3,500円
＊ヘルメット４個サービス！	１個 400円

★サンシリーズ セット定価 6,500円

ジープ	1,000円
ブルドーザー	1,200円
シャベルドーザー	1,400円
ダンプトラック	2,900円
＊ヘルメット２個サービス！	１個 400円

砂場用品

★キンダー砂場セット

セット定価 6,000円

砂型（４種類）	黄・緑	20コ
シャベル	赤・青	40コ
フルイ	ピンク	10コ
バケツ	赤	４コ
整理用カゴ	黄	２コ

★砂型トレイン …セット定価 1,100円

★ま す ……4個1セット 赤・黄・青・緑 250円

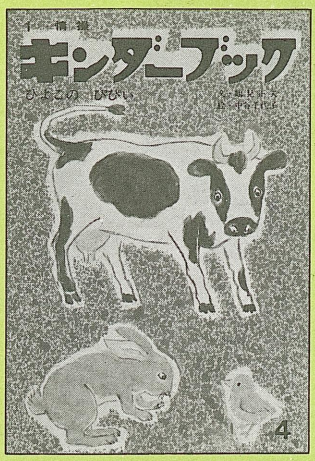
★一輪車（鉄製）…… 3,400円

株式会社 フレーベル館

お子さまの成長にあわせてお選びください

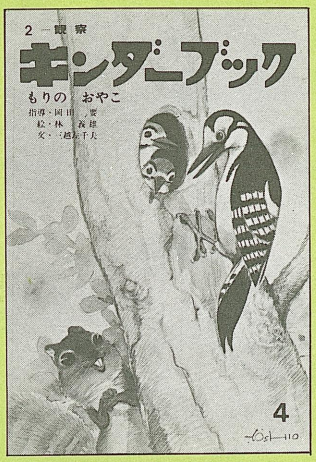
4月号・フレーベル館の5大月刊保育誌

情操をゆたかにし、創造力をのばす



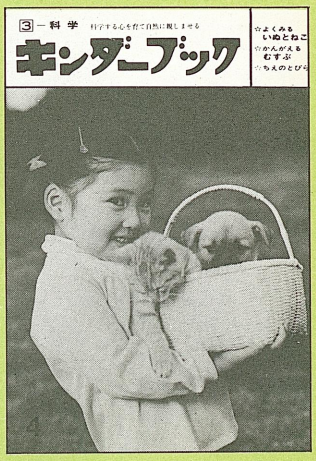
キンダーブック　1―情操
A 4 判・20頁・多色刷　つばめの
おうち　こいのぼり　特別付録
団体購読価**100円**

観察の眼をそだて、心情をゆたかにする



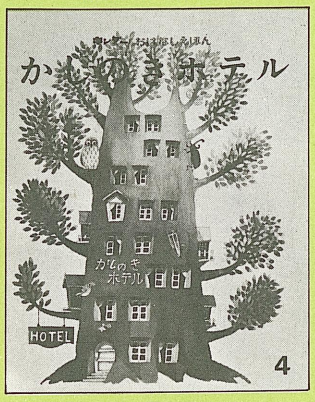
キンダーブック　2―観察
A 4 判・36頁・多色刷　つばめの
おうち　こいのぼり　特別付録
団体購読価**130円**

科学する心をそだて、自然に親しませる

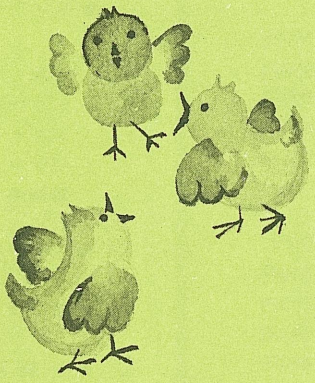


キンダーブック　3―科学
A 4 判・36頁・多色刷　つばめの
おうち　こいのぼり　特別付録
団体購読価**130円**

幼児の心を育てる



キンダーおはなしえほん
L 判・36頁・多色刷　こいのぼり
特別付録
団体購読価**130円**



園児をもつ母親の専門誌

ホームキンダー
L 判・100頁・多色刷　特別付録
団体購読価**100円**